大阪文化財センター調査報告書XⅣ

都市計画道路貝塚中央線建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書

昭和51年3月

財団法人　大阪文化財センター

はしがき

財団法人　大阪文化財センター
理事長　加藤三之雄

貝塚市内には秦廃寺跡や史跡指定を受けた丸山古墳など著名な古代遺跡が知られていますが、府下では比較的分布密度が粗な地域であります。

現在周知された遺跡が少なくとも、今後新らたに遺跡が発見されることは十分考えられることであり、現に畠中遺跡や近義堂遺跡も大阪府の遺跡台帳には近年まで記されていなかったものであり、在地の研究者の熱心な探査によって発見されたものであります。しかしこうして新らたに知られた遺跡が次から次といわゆる「開発」によって破壊されていくのはまことに残念な次第であります。泉南地方での道路建設等は見覚しく、関西新空港等も噂される今日、かかる事態は増々深刻化してゆくと思われます。従って私共文化財センターの仕事もよほど姿勢を正してかからねばと覚悟しておりますが、試掘調査を積極的に進めざるを得ぬ現状であります。ともあれ現状では試掘調査を当該遺跡のデーターを詳報することを目標として進めております。

今回、都市計画道路建設予定地内に当る脇浜遺跡、畠中遺跡、石才近義堂遺跡に関して大阪府教育委員会、同土木部を始めとした関係者各位におかれましての協議が遺跡保存へ向うことを願うものであります。

1976年3月

例　言

1)　本冊子は財団法人大阪文化財センターが、大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受けて実施した都市計画道路貝塚中央線建設予定地内の埋蔵文化財試掘調査報告書である。

2)　調査は、財団法人大阪文化財センター業務課調査室が担当し昭和50年12月1日より昭和51年1月23日まで現地調査を行い、同1月2日より3月19日まで出土遺物の整理及び、報告書の作製作業を行った。

3)　現地調査は調査室長、中西靖人の指示の下、調査室調査員、辻内義浩が担当し、赤木克視、寺川史郎、杉本二郎、辻本武、平川誠、尾下守弘、山崎博の諸氏の援助を受けた。

遺物整理は朝井文子、寺川史郎の諸氏の援助でなした。

4)　調査に要する経費（6,050,000円）は全べて大阪府土木部岸和田土木事務所が負担した。

5)　本冊子の執筆は、辻内義浩が当った。

6)　貝塚市教育委員会嘱託、南川孝司氏に本遺跡採集の遺物を借用する等多大の援助を賜った。記して感謝する。

目　次

はしがき

例　言

〔Ⅰ〕調査に至る経過……1

〔Ⅱ〕調査の目的と方法……1

〔Ⅲ〕位置と環境……2

〔Ⅳ〕調査の結果……3

1．脇浜遺跡……3

2．畠中遺跡……8

3．石才近義堂遺跡……18

〔Ⅴ〕まとめ……21

図版目次

図版一　調査地域周辺の遺跡分布図

図版二　脇浜遺跡遠望・畠中遺跡遠望

図版三　脇浜遺跡第１トレンチ・脇浜遺跡第９トレンチ

図版四　畠中遺跡第25トレンチ・畠中遺跡第26トレンチ

図版五　畠中遺跡第31トレンチ・石才近義堂遺跡第38トレンチ

図版六　第25、29、31トレンチ出土遺物

図版七　近義堂遺跡・脇浜遺跡出土遺物

図版八　畠中遺跡・近義堂遺跡出土遺物

図版九　トレンチ位置図

図版十　脇浜・畠中・近義堂遺跡地層柱状図

図版十一　出土遺物実測図

挿図目次

挿図 1　貝塚周辺の地形図
〃 2　第 1 トレンチ平面・断面図
〃 3　脇浜遺跡出土遺物
〃 4　第 8 トレンチ平面・断面図
〃 5　第 9 トレンチ平面・断面図
〃 6　第10トレンチ断面図
〃 7　第11トレンチ平面・断面図
〃 8　第12トレンチ地層断面図
〃 9　第13トレンチ地層断面図
〃 10　第14トレンチ地層断面図
〃 11　第15トレンチ平面・断面図
〃 12　第16トレンチ地層断面図
〃 13　第17トレンチ平面・断面図
〃 14　第18トレンチ平面・断面図
〃 15　第19トレンチ平面・断面図
〃 16　第20トレンチ・平面断面図
〃 17　第21トレンチ地層断面図
挿図18　第22トレンチ地層断面図
〃 19　第23トレンチ地層断面図
〃 20　第24トレンチ地層断面図
〃 21　第25トレンチ地層断面図
〃 22　第26トレンチ地層断面図
〃 23　第27トレンチ平面断面図
〃 24　第28トレンチ平面断面図
〃 25　第29トレンチ地層断面図
〃 26　第30トレンチ地層断面図
〃 27　第31トレンチ平面断面図
〃 28　第32トレンチ平面断面図
〃 29　近義堂・畠中遺跡出土石鏃
〃 30　第33トレンチ平面断面図
〃 31　第34トレンチ地層断面図
〃 32　第37トレンチ地層断面図
〃 33　第38トレンチ平面断面図

〔Ⅰ〕調査に至る経過

大阪府土木部街路課が建設を予定する都市計画道路、貝塚中央線は貝塚市の中央部を東西に縦貫する道路で、現在すでに開通している第２阪和国道や、建設予定の臨海線といった南北の主要幹線道路と結びつくことが計画される道路である。その予定路線の内、国道26号線から第２阪和までの区間には、脇の浜遺跡、畠中遺跡、石才近義堂遺跡が周知されていた。このため大阪府土木部街路課と大阪府教育委員会との協議がなされ、上述の遺跡に対して遺跡の範囲、埋没深度、遺構の有無、層位関係、遺物の量、遺跡の時期等を正確に把握することを目的とした試掘調査を実施することで一致した。その結果、両者は試掘調査を大阪文化財センターに依頼する旨、合意がなされた。

これにより、大阪府土木部は昭和50年10月３日付で大阪文化財センターに調査依頼がなされた。その前大阪文化財センターは大阪府土木部に調査計画書を伴えて依頼を受ける旨回答した。その結果昭和50年12月１日付で大阪府岸和田土木事務所と委託契約を結び、昭和50年12月１日に現地調査を開始した。

〔Ⅱ〕調査の目的と方法

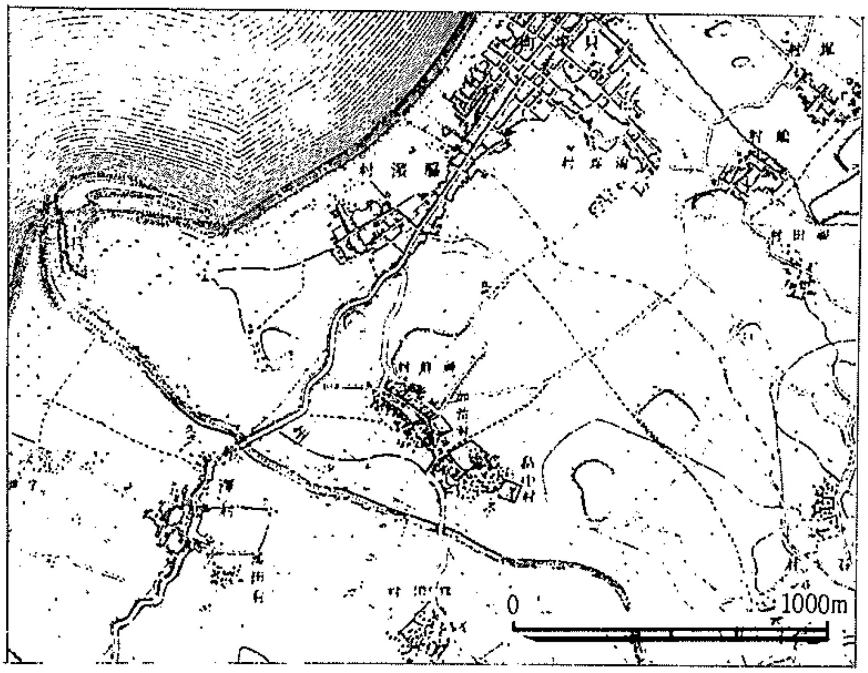
調査は国道26号線から第２阪和国道までの調査対象地区である路線予定地の両サイドにそって巾２ｍ、長さ100ｍのトレンチを片サイドづつ交互に、いわゆるチドリ型にトレンチを設定する予定でいた。そしてこれは掘削土量の点から上層は機械掘削を考えていたのであるが、ユンボ等の重機を発掘現地へ搬入する道路がなく、又予定路線内で重機の行動が耕作物や水路等のため制約されることが予想される等の理由で、機械掘削をすべて人力掘削に変更し発掘規模を縮少した予定路線の両サイド50ｍごとに３ｍ×３ｍで発掘を実施した。したがって北側19ケ所、南側19ケ所、計38ケ所のグリッドを設けた。発掘終了後、埋め戻し旧状に復した。

後述するが本遺跡の遺物包含層及び生活面が安定した層とならないので、多くのトレンチで地層確認のためのテストピットを掘削した。

又、聞きこみ調査は南川氏より分布調査の確認をなしたに止まる。

〔Ⅲ〕位置と環境

脇浜、畠中、石才近義堂の３遺跡はいずれも貝塚市にあり、和泉山脈に源を発し、大阪湾にそそぐ近木川下流の右岸、水田地帯に位置する。現在は人家が建ち並び近辺の地理的環境がよくつかめないが、挿図１の地図で見ると周辺よりわずかに高まり、舌状の台地を呈している。その台地中央部を３遺跡は占地している。今回の調査ではこの台地上より縄文、弥生、古墳、中・近世の遺物が出土したが、遺物は時代の多様性に較べその量は少なく性急な結論を控えるとしても、この台地上に古墳時代集落と古代寺院の存在したことは確実である。他にこの台地上に所在する遺跡は、大阪府遺跡分布図(1971年度版)によると、平安時代古瓦を出土した長楽寺跡、奈良時代古瓦を出土した加治神前遺跡が記載されている。他に文献や伝承で知られるものとしては、「行基年譜」に行基が作ったと記載される船息二所の内「神前船息」は和泉国日根郡日根里近木郷内とされ、これは近木川河口附近にあったのであろう。中世には「神前干軒」と呼ばれる集落があったと伝承されている。又一の坪といった小字もあり条里がひかれていたなど、この台地が古くからの生活の場であったことは想像に難くない。いかなる人人が居住したか明らかでないが、「新撰姓氏録」に近義首という新羅系の渡来人の名が見え近義郷居住者として注目される。



挿図１　貝塚周辺の地形図

天正年間の貝塚日記や根来軍記に畠中城の名が見える。この城は本願

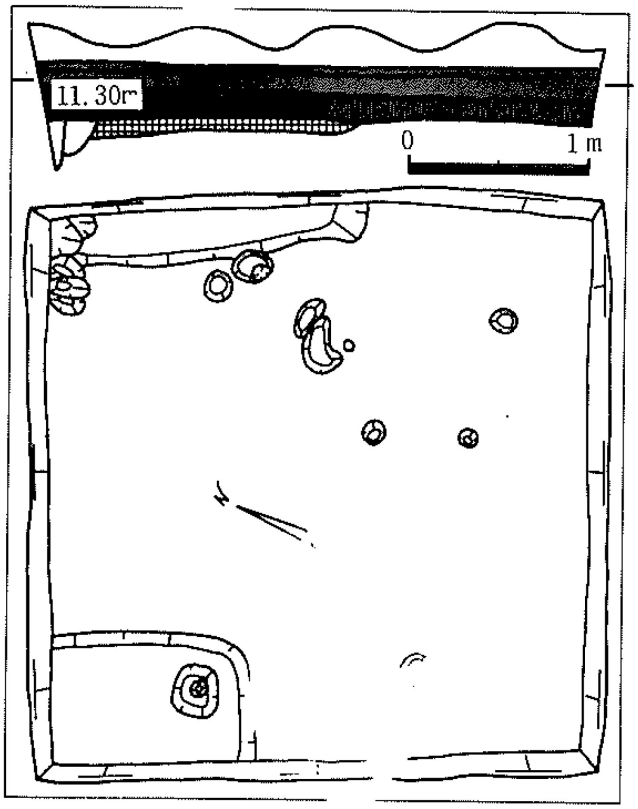
寺門徒と織田信長の争いの際、本願寺門徒の拠点となったところで、貝塚城と伴に焼かれたもので、「貝塚日記」天正十三年三月廿一日の条に「同日入、夜畠中城自焼して悉取退畢、是は百姓持ちたる城也」とあり、近隣の土豪の築造したものであることが伴る。現在畠中にある土豪神前氏の邸宅が畠中城跡といわれている。

現在の貝塚の市街地は石山戦争の後、貝塚御坊（願泉寺）を中心に貝塚寺内町が復興され、教団の中心地としてまた在郷町としての商業的性格を強めて発展していったものであり、貝塚の中世以前の姿を明らかにするにはこれらの遺跡が注目されるものである。

〔Ⅳ〕調査の結果

1、脇　浜　遺　跡

脇浜遺跡としては、国道26号線から市道小瀬王子線に至るまでの約 300m の間で、No.1 トレンチからNo.11トレンチの11ケ所を掘削した。この内No.2 トレンチからNo.7 トレンチまではレンガ用粘土の採土がなされた為、撹乱土層中に若干の遺物を残すのみで、まったく旧状を止めていなかった。他のトレンチからは全て遺物包含層が検出されたものNo.8 ～No.11トレンチとNo.1 トレンチでは地層の状況に若干の異いがあり、同一遺跡とはにわかに伴じ難いが、脇浜遺跡として包括することとした。なおこの遺跡の範囲は国道26号線より西方 200m にある海蝕崖附近まで及ぶと考えられる。更に東限は畠中遺跡との境が不明瞭である。というよりむしろ畠中遺跡と区別がつかない状況であり、従って海蝕崖附近から南海本線附近までを脇浜遺跡とすることも可能である。しかしいずれにしろ出土遺物が弥生時代より中世に及び、この遺跡が各時代の復合した遺跡であり、時代の異なる集落が若干の区域的ずれをもちつつ重り合っていることは想像に難くない。そしてそれ故か、弥生、古墳時代遺物が出土するものの遺構は伴然としない情況である。わずかに土錘やタコ壺等の魚撈具等の出土遺物から海辺に臨んだ集落の特長をうかがわせているにすぎない。

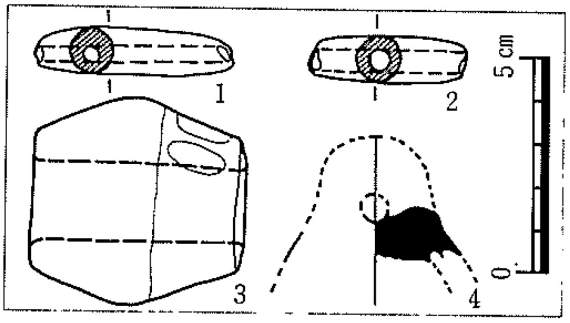


挿図２　第１トルンチ平面・断面図

第１トレンチ

国道26号線のすぐ東側の畑にトレンチを設定した。この畑だけが周囲の水田よりも50cmから１m以上高まっている。周辺はレンガ用粘土の採土のため掘削されたもので、予定路線内ではこの北西隅だけが明治以前の旧地形を残している。

床土下の第３層(茶褐色粘質土)から近世瓦、須恵器、土錘等を出土。第４層（灰褐色粘質土）から須恵器、瓦器、中世瓦質土器、土師器、土錘等が出土した。第４層で時代の判別できる遺物は中世以前に限られ、黄褐色粘質土層を切り込んだピットは瓦器や中世瓦質土器の時代のものであろう。これらのピットの内トレンチ北西隅のピットが直径15cmの堀立柱とその掘方である。他は浅い不整形なピットで用途不明である。



挿図３　脇浜遺跡：第１トレンチ出土（１、２）
第７トレンチ出土（３）
第11トレンチ出土（４）

第２トレンチ

レンガ用粘土を採土するために明治年間に掘削され旧地形を残していなかった。床土の下層は若干の遺物を含む攪乱土の堆積があり、その下層には黄褐色粘土層の地山となる。この攪乱土層は採土後埋め立されたものであり須恵器、土師器（いずれも時期不明）青磁、瓦器等の破片を出土した。採土以前この地に遺跡の存したことは誤りなかろう。

第３トレンチ

第２トレンチと同様レンガ用粘土の採土のなされた地点であって、攪乱土層中より瓦質土器を１片採集しただけである。

第４トレンチ

南海本線のすぐ横に設定したトレンチである。このトレンチもレンガ用粘土の採土地であり、床土下は赤褐色砂礫土の地山であり、床土中より近世磁器、須恵器、瓦器等の小片が若干出土した。

第５トレンチ

第３、４トレンチと同じくレンガ用粘土の採土地である。遺物は採集できなかった。地山は黄褐色砂礫層であった。

第６トレンチ

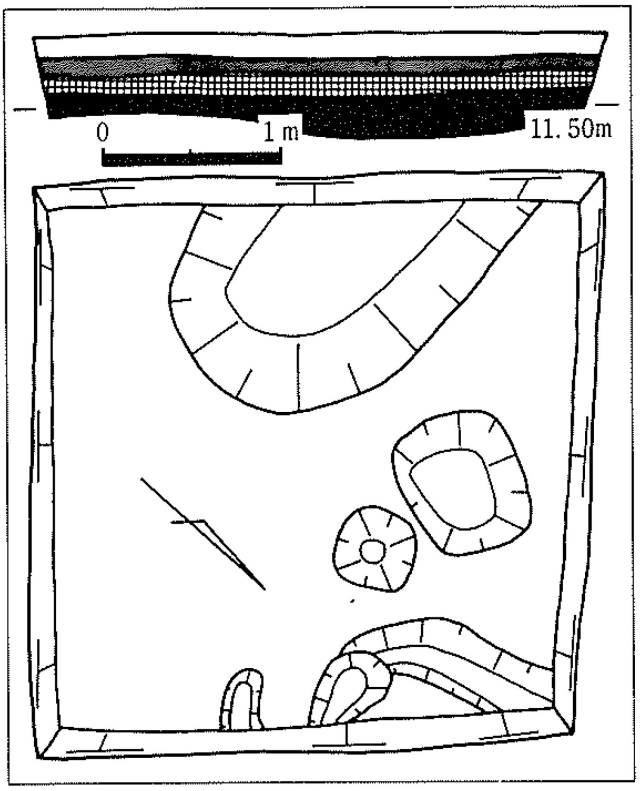
第３、４、５トレンチと同じくレンガ用粘土の採土地である。攪乱土層中より弥生式土器、土師器(いずれも時期不明)瓦器、瓦質土器等若干を出土した。

第７トレンチ

同じく採土地で、攪乱土層中より、青磁、瓦器、須恵器等近世瓦等の出土を見た。

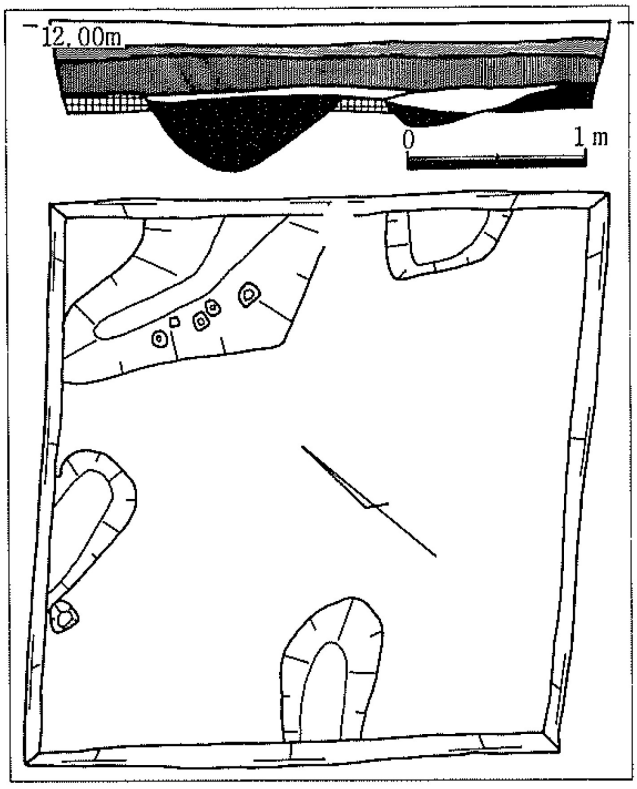
第８トレンチ

耕土中より須恵器、陶器、土師器片等、第４層（黒色土層）より土師器片を出土した。第４層中の土師器はいずれも時期を判別し得ない細片で層の上部に偏在し、下部から何ら遺物は検出されなかった。この様な状態は後述するが畠中遺跡での包含層のあり様と同じであり、従って黒色土層上部は６世紀後半の



挿図４　第８トレンチ平面・断面図

遺物包含層であろう。第4層下層の黄褐色粘質土層は地山であり、この層に図の様な不定形ピットがある。このピットが上述包含層に対応する人為的な遺構である確証を得ることができなかった。ピット中はデコボコで人為的掘削によるものとは考え難く、自然地形であろうと思われる。がそうなると上述包含層に対応する生活面が不明であり、今後に問題を残した。



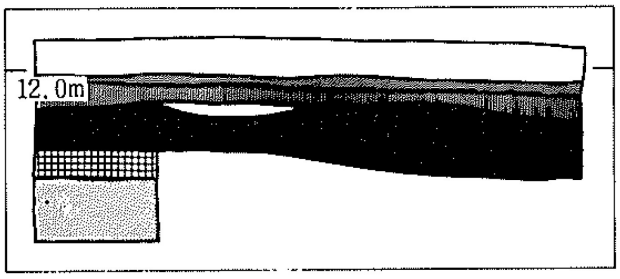
挿図5　第9トレンチ平面・断面図

第9トレンチ

第3層黄褐色土層より土師器、中世陶器等を各々数点ずつ出土した。第4層は暗褐色土層の地山でこれを掘り込んで黒色土のつまった不定形な土拡や落ち込みを検出した。平面図の北隅の土拡は人為的なもので上部が灰混りの灰黄褐色土で覆われており、黒色土上部には焼土がブロックで混入している。又土拡の壁面には角抗の打ちこまれた跡と思われる小ピットが検出された。なお黒色土中より遺物は検出されず、第8トレンチの黒色土との関係も現在のところはっきりしない。

第10トレンチ

第3層（黄褐色土層）より弥生式土器、土師器、陶器、瓦器、第4層（黒色粘質土層）より瓦器2点、土師器10点、弥生式土器6点が出土した。黒色土を切り込み、南一北方向に走る浅い溝が検出された。この埋め土（灰褐色土）より黒色土器片が1点出土したが、黒色土中に瓦器が含まれるので、この溝の年代は中世以降と

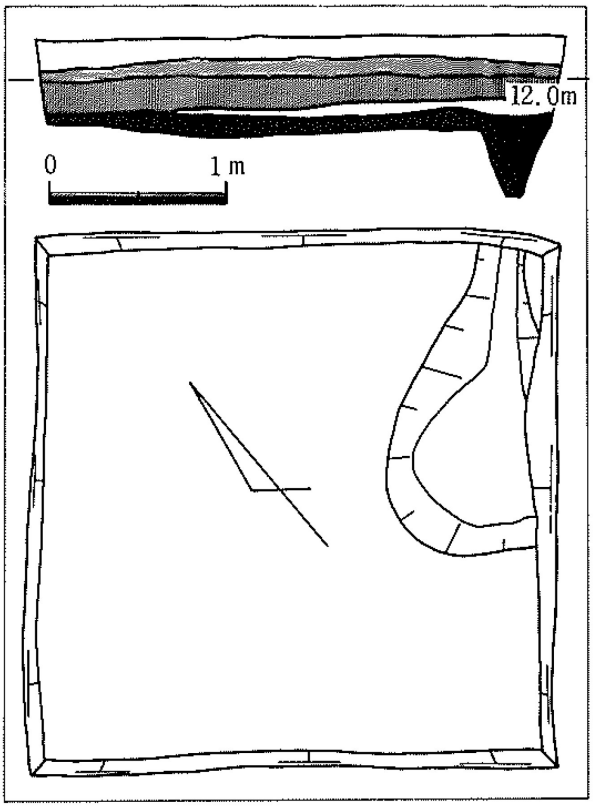


挿図6　第10トレンチ断面図

考えられる。20cm以上ある黒色土中の遺物を一括して取り上げてしまったので土師器と弥生式土器の層位関係を明らかにし得なかったが、土師器を使用した人々の生活した地表面を検出すべく黒色土層を分層的に掘り下げたが成功しなかった。しかし黒色土層中に生活面があるのではないかという疑いは捨てることができない。この点は第８トレンチでの遺物のあり方からも考えられることであって、後述するが畠中遺跡である程度解決することができた。

第11トレンチ

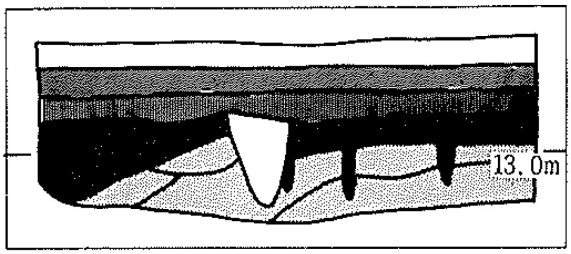
第４層（黒色土層）より瓦質土器土層であるが、土坑中より須恵器(タコ壺)土師器等を出土した。トレンチの西部分では黒色土層下が砂礫土層の地山で、東側部分では暗黄褐色砂質土層の地山である。この砂質土層を切り込んで土坑が掘られていた。深さ50cmで坑中には黒色土と伴に焼土が多量に充満していた。焼土は地山面にも散らばってあるが、拡中には灰や炭等とともに壁状に固まった土塊が多い。そして坑底の一部には細いジャリの堆積もあり、水が流れ込んでいたように思われる節がある。この拡中からは須恵器と土師器しか出土しなかったが、第４層中には中世以降の瓦質土器等が含まれており、土坑の掘削もこの時代とするのが妥当であろう。又第10トレンチの黒色粘質土との関係が伴然としないが、土質が粘土ぽい様子がなく明らかに異なっている。地山も第８～第10トレンチまでは（暗）黄褐色粘土であるが、第11トレンチでは砂質土と変わった点も注意すべきことである。



挿図７　第11トレンチ平面・断面図実測図

2、畠 中 遺 跡

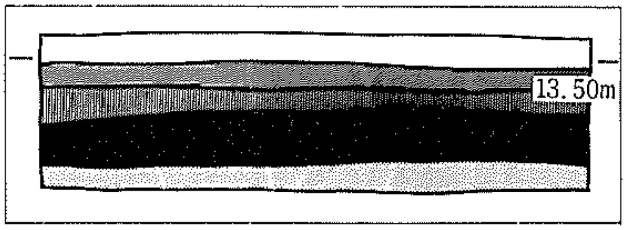
市道小瀬王子線よりコモ池附近に至る約620mの間、第12トレンチから第32トレンチまでの21ケ所を畠中遺跡で掘削した。この遺跡の範囲は前記した如く脇浜遺跡との境界が不明瞭である。南限も又同様に石才近義堂遺跡との境界もはっきりしないが、第33トレンチから瓦の出土量が多くなるので、第32トレンチまでとした。遺物は縄文、弥生を始め中、近世に至るまでの各時代のものがあるが、古墳時代遺物（6世紀後半がおも）の量が最も多く、遺構も第31トレンチの古墳時代溝が最も顕著な遺構であった。縄文時代は石鏃1本だけである。弥生式土器は時期を確認できたものは中期1点、後期若干で、ほとんど小片で摩耗も著しいものである。これらは全て須恵器や瓦器等と伴出したものであって現在のところプライマリーな弥生時代包含層は確認できなかった。ただ第26トレンチの第8層の溝は弥生時代と考えられるのである。中、近世遺構は第15 27トレンチから溝状遺構が検出されるなど、第16トレンチを除き、調査したすべてのトレンチから何らかの遺物もしくは遺構が検出され、複合遺跡であることが確認される。



挿図8　第12トレンチ地層断面図

第12トレンチ

第3層より土師器と思われる小片が3片出土しただけである。第4層は黒色有機質土のいかにも包含層らしい真黒の土であるが遺物は検出し得なかった。黒色土下は黄褐色砂層で湧水が多いため、黒色土の落ち込みは断面で確認しただけである。人為的なものかどうか不明である。



挿図9　第13トレンチ地層断面図

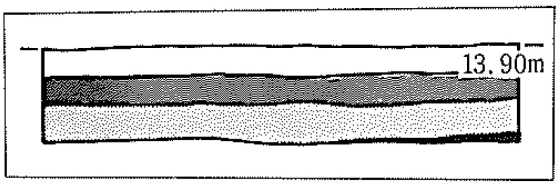
第13トレンチ

第3層（黄褐色土層）より黒色土器1片、土師器の細片3点、第4層（黒色土層）より土師器細片1点、弥生式土器1片を出土した。

黒色土下は一部分で暗褐色粘土が見うけられる他は暗黄褐色砂層であり、東から西に低くなる状態が認められた。人為的遺構かどうか不明である。

第14トレンチ

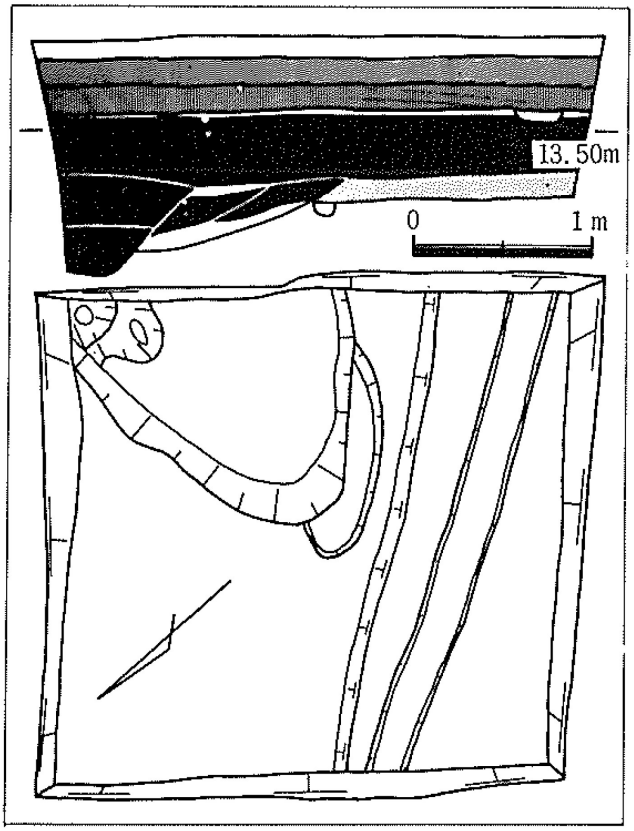
第３層（黄褐色土）より須恵器、土師器、瓦器、磁器、瓦等がいずれも数点出土した。第３層の下層はわずかに薄い黒色土層が一部にあるが直接黄褐色粘質土層となっている。地山面は平担で若干のピット状の浅い落ち込みがあるが、遺構としての明確さに欠ける。しかし周辺部のトレンチは第12 13トレンチのように包含層に対応する生活面としての安定した地層がないことを考えると、やや高くなっているこのトレンチ附近からの流出した遺物とも考えられ、このトレンチ附近の地山面は注目されるところである。



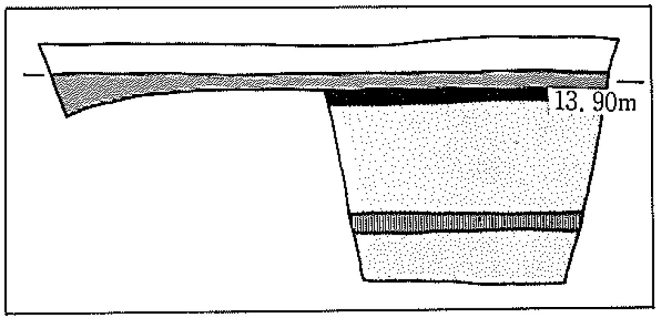
挿図10　第14トレンチ地層断面図

第15トレンチ

第３層（黄褐色土）より須恵器土師器、中世陶器を数点出土、黒色土上面より須恵器、瓦器、土師器、弥生式土器を数点、黒色土中より土師か弥生か判別し難い、磨滅した小片が７点ばかり出土した遺構は第３層下の灰褐色土層を切って巾28cm、深さ８cmの南一北に走る小溝、第５層の暗褐色砂層を切り込んだ用途不明の不定形ピットが検出された。伴に遺構中より遺物は認められず、前者は中世以降、後者は中世以前としかわからない。



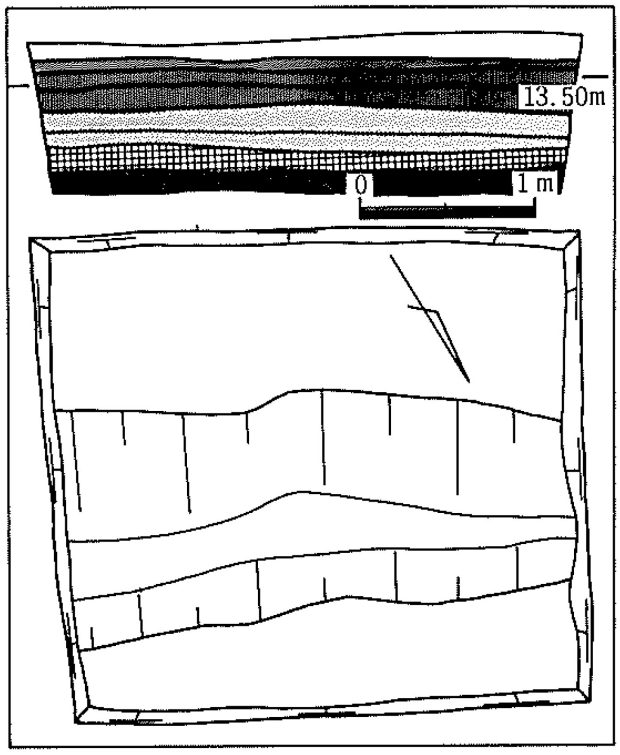
挿図11　第15トレンチ平面・断面図



挿図12　第16トレンチ地層断面図

第16トレンチ

遺物は出土しなかった。床土の下に礫混りの黒色土が堆積しているが、二次堆積と思われる。又この黒色土の下を100cm まで掘り下げたが、ずっと砂礫層であった。この砂礫層は水流によって形成されたと思われ、かつては近木川に流れ込む小川が流れていたことが想定される。



挿図13　第17トレンチ平面・断面図

第17トレンチ

第４、５層より古墳～平安時代の須恵器、土師器、瓦器、中世陶器等を出土。第８層(黒色粘質土)の上面より６世紀後半の須恵器２点、土師器５点、土師器か弥生式か不明なもの５点を出土した。第８層の遺物は全て黒色土の上部より検出したものであって、下半部は全く遺物を含まなかった。

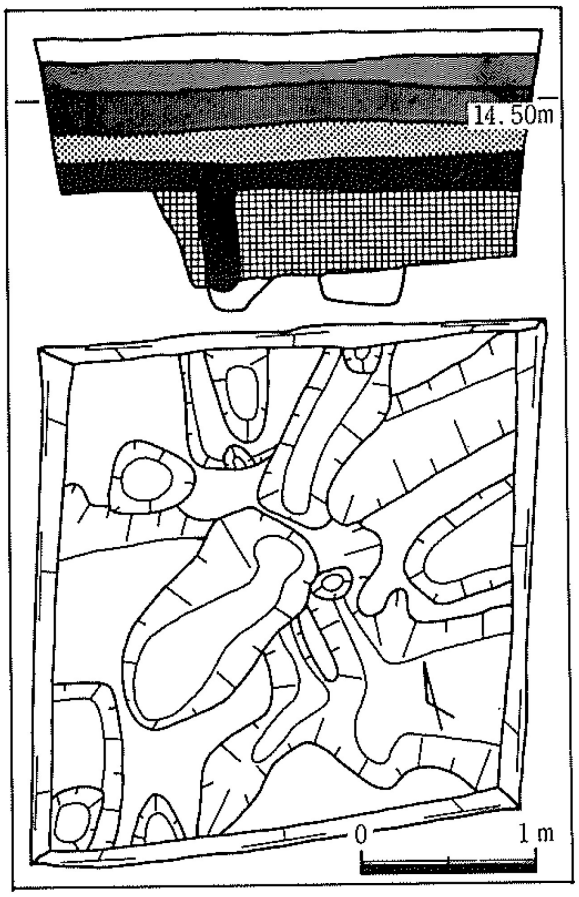
第12、13、15トレンチでの黒色土は黒色砂質土であったが、このトレンチ以降黒色粘質土と変わってしまう。しかも無遺物であったり、包含していても上層部に限られるようになる。黒色土層下の暗褐色粘質土面に巾 100 cm、深さ 20 cmの東一西方向の溝状の窪みを検出したが、遺物を含まず人為的遺構であるかどうか不明である。

第18トレンチ

第３層（黄褐色土層）より瓦質土器、須恵器、瓦器、土師器等を出土、第４

層（暗灰褐色土層）より瓦器３点、第５層（黒色土層）より瓦器１点、古墳時代須恵器、土師器各１点を出土した。黒色土層における遺物は第17トレンチ同様上層部に限られ、量も極めて少ない。

黒色土層下は暗褐色粘土層であり、この面は平担で地山と思われたが、トレンチの北西隅の部分で黄褐色粘質土が見うけられたので、暗褐色粘土層を掘り下げた。その結果、図の様な黄褐色粘土層の凹凸が検出された。しかし遺物を包含せず自然地形か人為的なものか判断できなかった。もし遺構であるなら弥生時代の遺構であろう。なおこの掘削の際暗褐色粘質土を切り込んだピットが断面で確認された。従って右図のピットの内第５層から切り込まれたものがあるかもしれない。

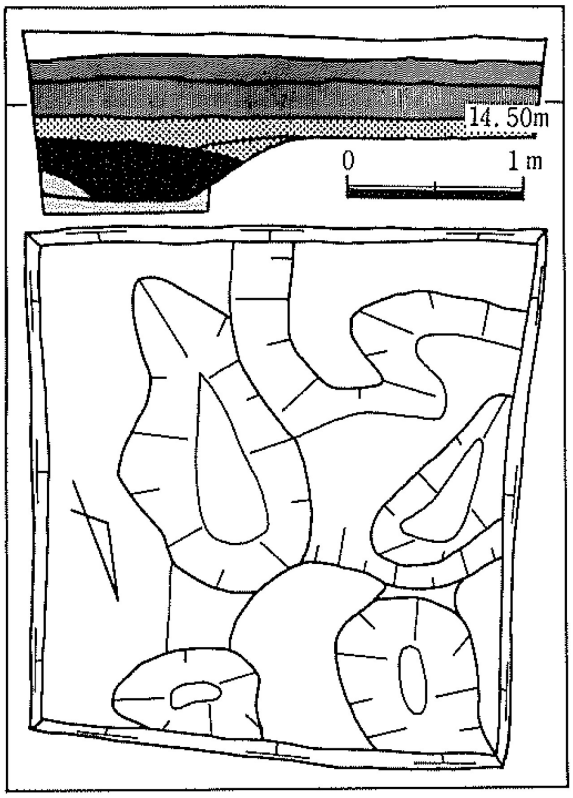


挿図14　第18トレンチ平面・断面図

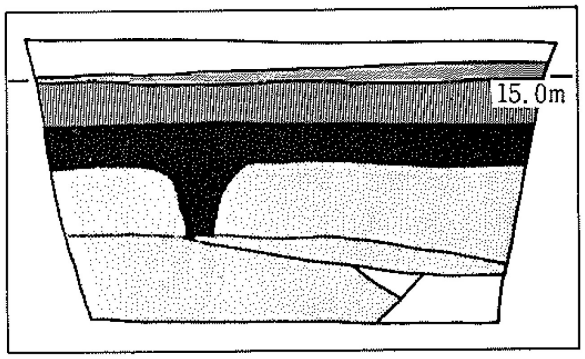
第19トレンチ

第２、３層より古墳～奈良時代須恵器、瓦器等、第４層(灰褐色土層)より須恵器、瓦器、瓦質土器、灯明皿、黒色土器等、第５層(黒色土層)より宝珠つまみの須恵器を出土した。

地山は暗灰色砂層で、黒色土の埋った凹凸が認められた。トレンチの西隅みがやや高く、中央が低まっている。第４層の遺物包含層に対応する遺構かもしれない。



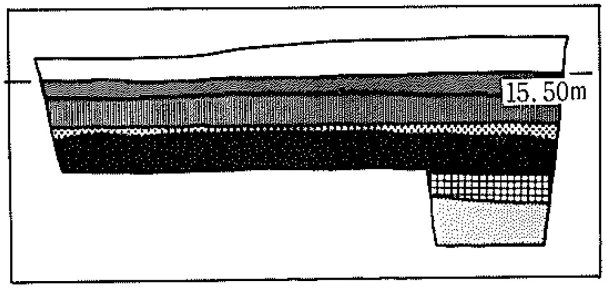
挿図15　第19トレンチ平面・断面図



挿図16　第20トレンチ平面・断面図

第20トレンチ

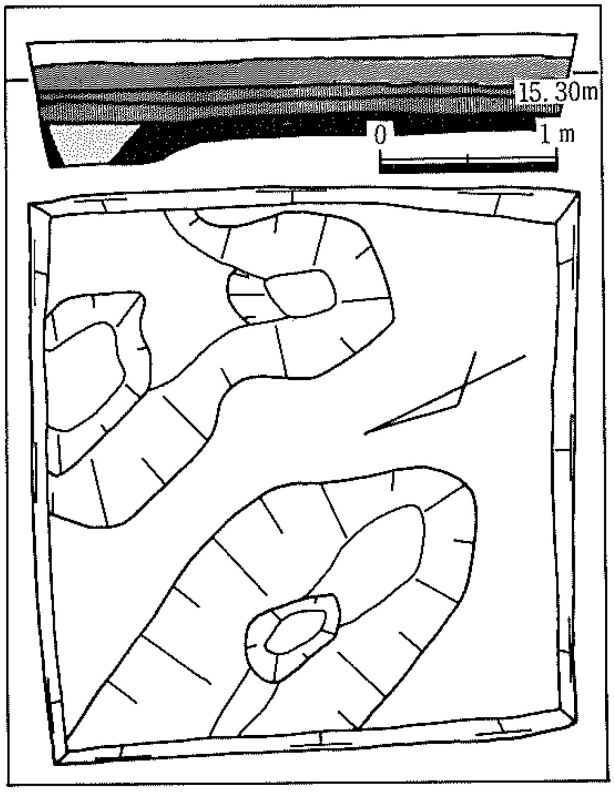
第３層（黄褐色土層）より磁器、須恵器、土師器、弥生式土器が若干出土した。黒色土層から遺物は検出し得なかったが、他のトレンチの黒色土層同様若干の遺物を包含する可能性は極めて強い。黒色土層下は茶褐色粗砂層であり、砂層は黒色土層下約２ｍ続くことを確認した。



挿図17　第21トレンチ地層断面図

第21トレンチ

第３層から土師器が１片検出されただけで第４、５層で遺物は認められなかった。地山面(暗褐色粘土層)からも遺構は検出し得なかった。



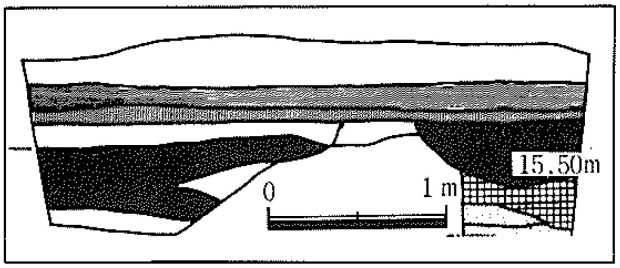
挿図18　第22トレンチ平面・断面図

第22トレンチ

第２、３層より須恵器、土師器瓦器、近世磁器等を、第４層（黒色土層）より須恵器、土師器、瓦器、不明等を出土した。黒色土中は各々４、５点であるが、第３層中の瓦器は20点をこえた。南方のトレンチになるに従って土器の量が増加する傾向がある。遺構は暗褐色砂礫層を切って黒色土でつまった不定形ピットを２つ検出した深さはそれどれ30～40cm程度であり、用途、機能は不明であるが、人為的遺構として大誤あるまい。

第23トレンチ

第２、３層から瓦器、土師器、須恵器、第４層（灰褐色粘質土）から古墳時代須恵器（壺、平瓶）土師器、不明（弥生か）を出土した。遺物は検出し得なかった。

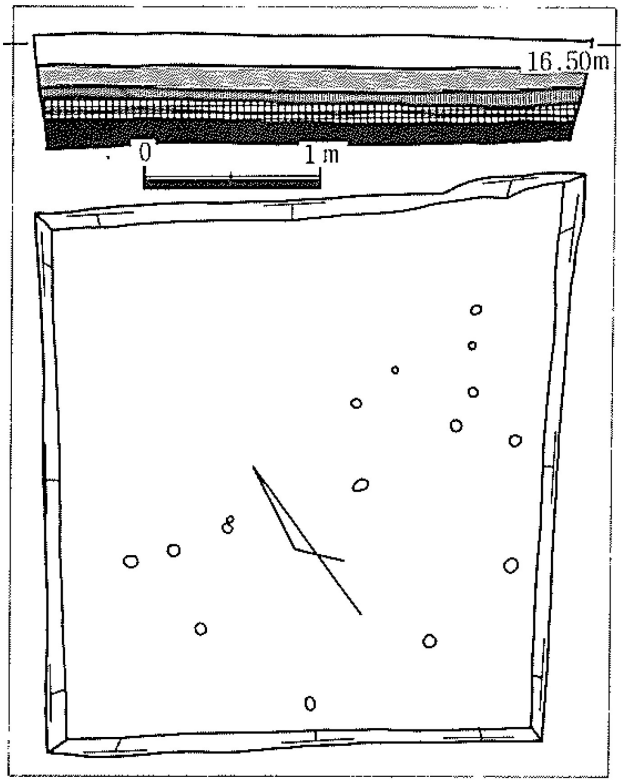


挿図19　第23トレンチ地層断面図

黒色土はトレンチ南側では深さ40cm、西側で深さ40cmの窪みに堆積した状況であるが黒色層下に包含層の存する可能性を考え、試掘をしたが、地表下90cmの暗褐色粘土の下は地表下２ｍまで掘ったがすべて砂層であった。

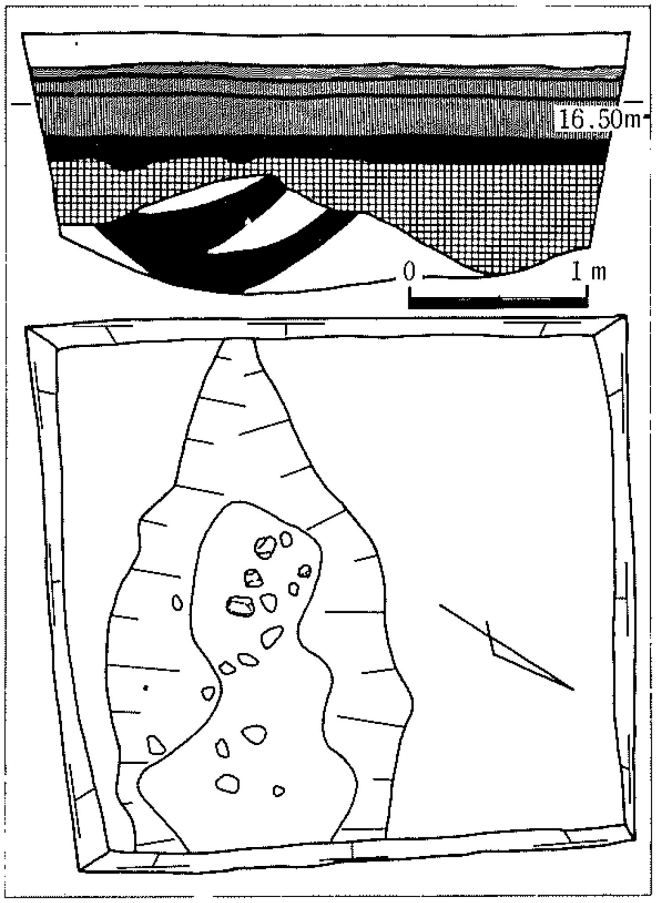
第24トレンチ

第２～４層から須恵器、瓦器、土師器等７点が出た。第５層（灰褐色土層からは古墳時代須恵器(壺)平安時代（胚蓋）瓦器、土師器、４様式と思われる弥生式土器(壺)や時期の判別し得ない弥生式土器、サヌカイト１片が出土した。このトレンチでも黒色土層から遺物は検出されなかったが、黒色土を除去した黄褐色粘土層から５～７cmの杭の跡と思われる小穴が検出された。図上北隅に小穴がないのは、遺構検出以前に土層観察図の試掘拡を入れてしまったせいである。



挿図20　第24トレンチ平面・断面図

その結果は黒色土下60cmまでは黄褐色粘質土が続くことが確認された。若干のトレンチを除いて黒色土層下は砂層の堆積である場合が多く、このトレンチ附近は居住適地として注目される。



挿図21　第25トレンチ平面・断面図

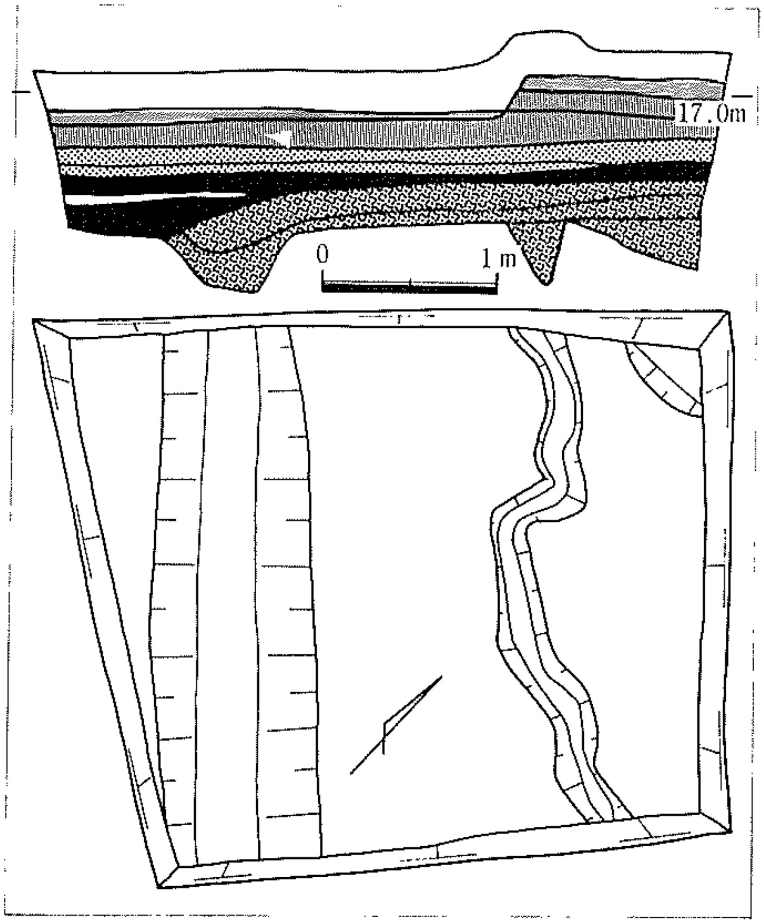
第25トレンチ

床土より灯明皿、近世瓦、土師、瓦器、平安時代須恵器等を、第４層（灰褐色土）より布目瓦瓦器20点、土師器（古墳時代高杯）古墳～奈良時代須恵器５様式と思われる弥生式土器20点等当遺跡としては比較的多くの置物が検出された。例によって黒色土上部に弥生式土器片や須恵器が検出された。このトレンチでは、第４層下面、及び黒色土層上部、中部での遺構検出作業を細かに行った。その結果黒色土上面でのの様な10cm弱の浅い落ち込みが検出され、その中からこぶし大の石が10数個検出された。更に掘り進めると暗褐色粘土がその下層では黄褐色粘土と黒色粘土が互層になっている状態が認められた。

第26トレンチ

第３層（黄褐色土）より近世磁器、互質土器、瓦器、黒色土器、須恵器、土師器、弥生式土器(？)を出土、第４層（灰褐色粘質土）より瓦器、土師器、弥生式土器を出土、そして第７層（灰褐色砂質土）から土師器か弥生式土器か不明であるが１点、厚手の弥生式土器１片が出土した。第５層上面には柱穴状の直径約30cmのピットが２ケ所検出され、中世頃の生活面と思われる。その下層の黒色土層は南へゆるやかに低くなりトレンチ南隅では約30cmの落ち窪んでいる。更にこのトレンチでは地山と考えた第７層中に遺物が検出されたので掘り

進めたところ大小２本の溝と土拡が検出された。北側の小溝は鋭く切り込まれ溝底部には粗砂の堆積も見うけられ自然の水流が作ったものかもしれないが、南側の溝は黒色土層堆積以前の確実な遺構として当遺跡唯一のものであり注目される。弥生時代として大誤ないであろう。更にこの溝を切り込んだ第８層に数cmくい込んだ所で縄文時代石鏃（挿図29）が検出したことも注目される。

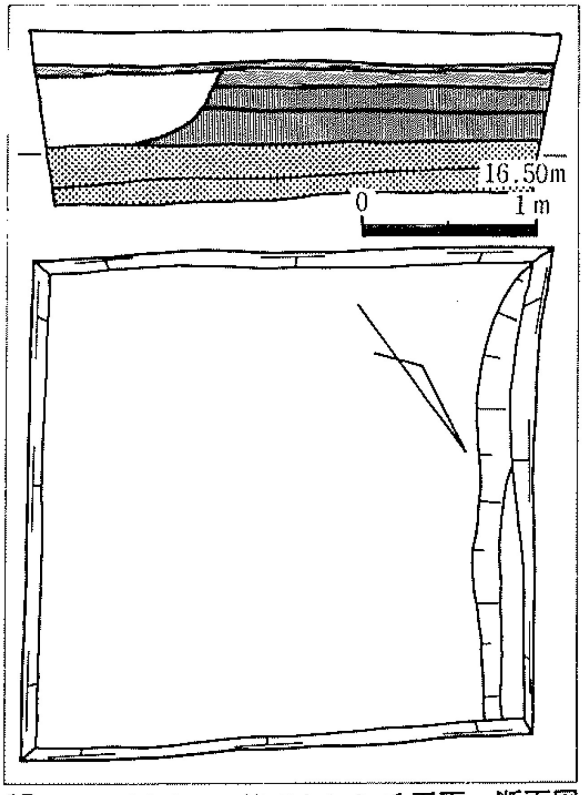


挿図22　第26トレンチ平面・断面図

第27トレンチ

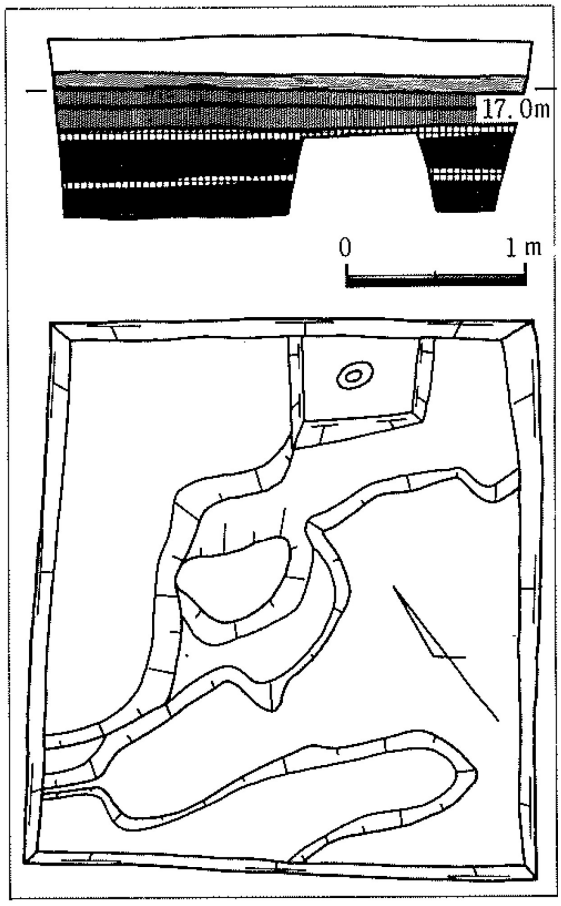
第５層（黄褐色土）より須恵器、瓦器、土師器磁器、第６層(灰褐色土)より須恵器、土師器、黒色土器、弥生式土器(５様式)等を、出土した。瓦器の量は本遺跡では最も多く42点あった。第７層（暗灰褐色土）からは古墳時代須恵器(杯甕)土師器、瓦器を出土した。

このトレンチでは黒色土層は検出されず、暗黄褐色粘土層の地山面は中世初頭の生活面と思われる。この面から溝状の遺構が検出されたが、隅がわずかにトレンチにかかっただけであり詳細は不明である。



挿図23　第27トレンチ平面・断面図

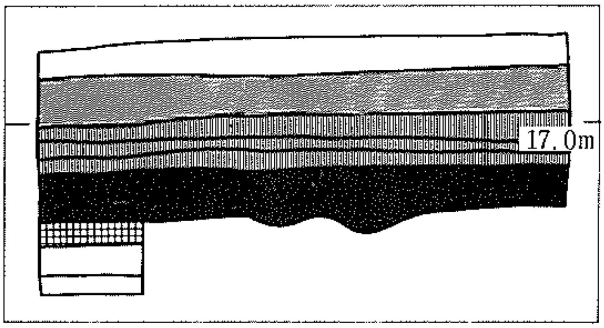
第28トレンチ



挿図24　第28トレンチ平面・断面図

第２層より古墳～平安時代須恵器、土師器（土釜）瓦器、瓦質土器（片口鉢）灯明皿等、第３層より須恵器、土師器、瓦質器器を第６層（黒色土）より土師器細片を１片出土した。第５層上面で直径約10cmの柱根と直径約30cmのその堀方が検出された。柱穴は１ケ所しか検出し得なかったが、中世建築遺構の存在は確実であろう。黒色土層の下、暗灰黄色粘質土が薄く堆積し、その下層に黒褐色粘土がある。更にその下層の暗黄褐色粘質土面は随所に浅い落ち窪みが認められたが、この落ち窪みに堆積する黒褐色土から遺物は検出し得なかった。従って遺構面としては第７層上面か第６層中に求めるのが妥当と考えられる。

第29トレンチ



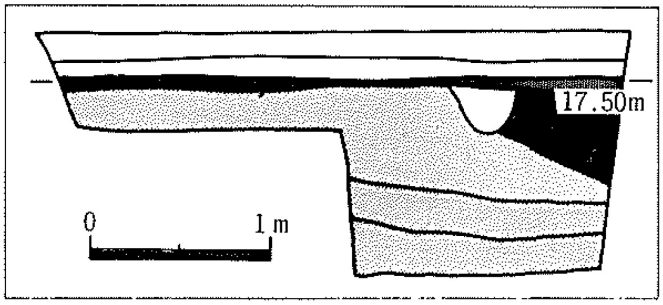
挿図25　第29トレンチ地層断面図

第３、４層より須恵器、土師器、瓦器等が、第６層（黒色土）から６世紀後半の須恵器高杯が出土した。しかしこのトレンチも黒色土層の下に遺構を認め得なかった。あるいはこの層は古墳時代頃の水田跡かとも考えられるが、水田跡の痕跡とされるマンガンの沈着はなかった。

第30トレンチ

第３層より土師器３点、第４層（黒色土）より土師器３点、弥生式土器３点を出土した。トレンチ西側の落ち窪みに堆積した黒色粘質土層から遺物は検出

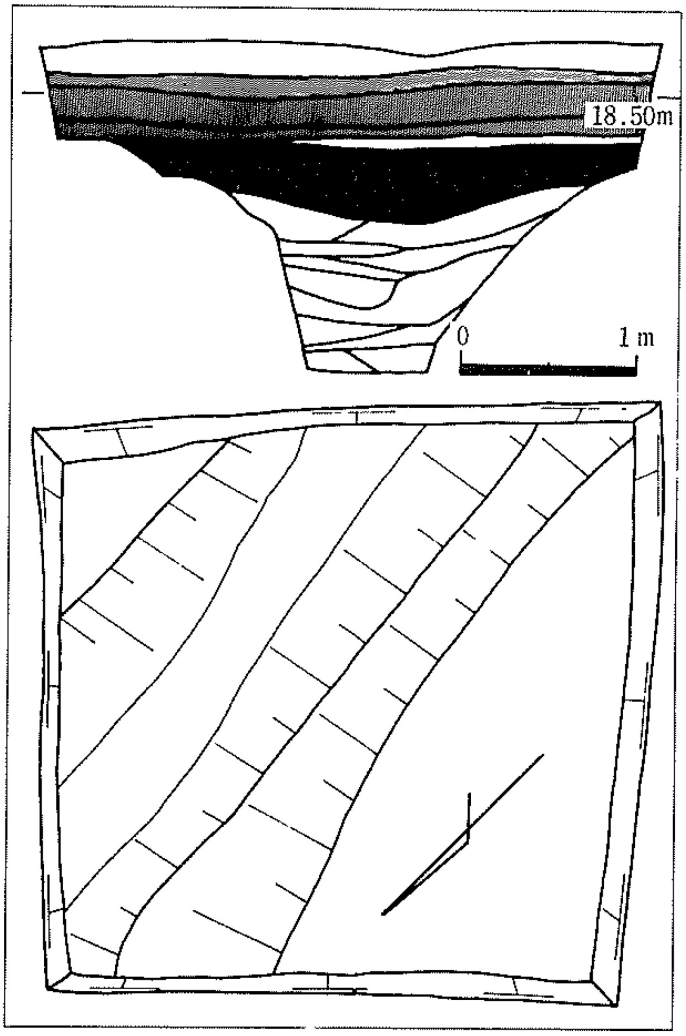
されなかった。黒色土層下は暗褐色砂礫層で、この層を切り込んだ。巾約1m、深さ65cmの溝状の窪みを検出したが、自然地形か、人為的遺構か不明である。



挿図26　第30トレンチ地層断面図

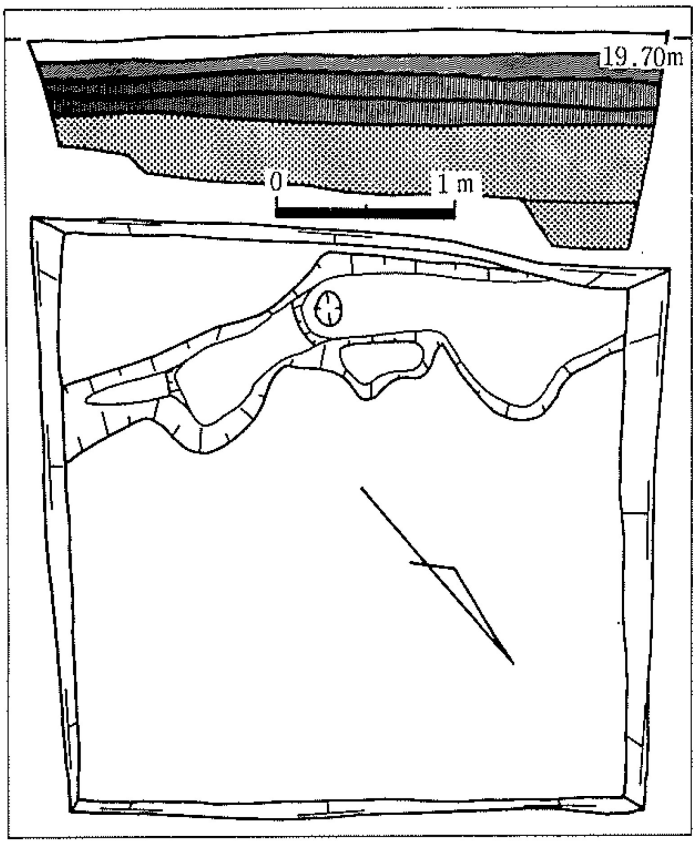
第31トレンチ

今回の調査地点の内で最も遺物の出土量が多いトレンチである。第3層は他のトレンチと同様、奈良、平安時代須恵器や土師器、瓦器等の小片が50点弱出土した。第4層下部と第5層（黒色土）上部から若干の瓦器と多量の須恵器、土師器と弥生式土器が10数点出土した。須恵、土師器はいずれも6世紀後半のものである。完形復元が可能な須恵器もあり、(図版11の5～19等）他所からの流入なり撹乱を考える必要のない唯一の地点である黒色土層下の茶褐色砂質土層中よりも土師器が出土した。須恵器は伴出せず、庄内式の破片も含まれていた遺構はトレンチ中央よりやや東側で、第4層下面より切り込んだ巾1.8m、深さ1.2mの大溝がほぼ南一北方向に掘削されているのが検出された。溝は砂礫層を掘削した整ったU字型の溝で、溝底は青灰色粘土が薄く堆積し、その上層は黒色土に至るまで粘質土層を若干含む砂層である。従って



挿図27　第31トレンチ平面・断面図

当初は水が流れていたのであろう。このトレンチで注目されるのは、これまでのほとんどのトレンチで見うけられていた黒色土層下部が無遺物であることがはっきりと断面で観察し得たこと。黒色土上部が古墳時代後期と確定し得たことである。従ってこの溝の掘削時期は古墳時代後期以前であり、古墳時代後期には水路の機能は果さず放棄されたものである。



挿図28　第32トレンチ平面・断面図

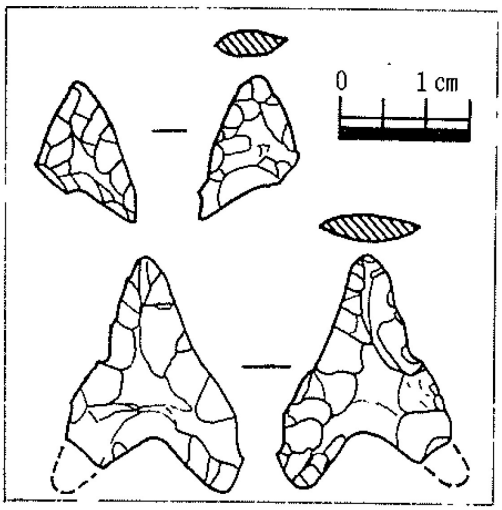
第32トレンチ

第4層（黄褐色土）より布目瓦、瓦器、土師、須恵器等、第5層（灰褐色粘質土）より古墳～奈良時代須恵器、土師器、瓦器を出土した。第5層は40cmをこえる厚い包含層であるが遺物の量は全部で50点にすぎない。遺構は第5層下面から暗黄色粘質土を掘り込んだ溝状遺構が検出された。この溝は東が高く西が低い、深さは平均25cm程度である。溝の埋土には黒色土も一部あるが、水の流れをことを示す砂層も認められた。この溝中から奈良時代須恵器が出土した。

3、石才近義堂遺跡

この遺跡に該当するトレンチは第33トレンチから第38トレンチまでで、市営プールから第2阪和国道までの約140m である。近義川の100m 北側の台地にあるこの遺跡は、各トレンチに瓦の出土が著しく、その名の如く寺院の存在したことをうかがわせる。しかしこの遺跡は脇浜と同じくレンガ用の粘土の採土地となっており、調査対象地域はほとんど採土の為攪乱されており、遺跡の詳細

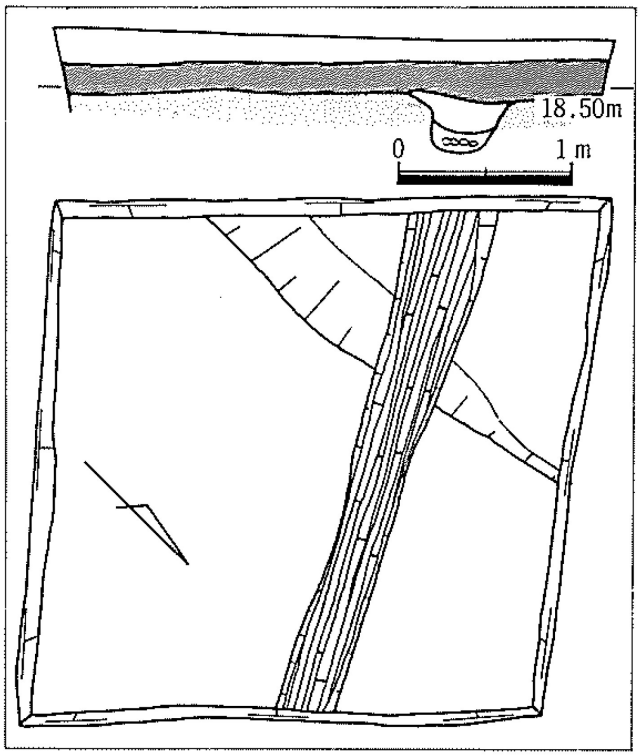
を知ることが出来なかった。わずかに第38トレンチ周辺だけが旧地表を残していることが確認された。南川孝司氏は第38トレンチの北東の水団より複弁蓮華文瓦(図版８)石鏃等を表採されており、遺跡が北東方向にひろがることや近義堂廃寺が平安時代創建であることを推測させるかが、今回の調査でも奈良時代に遡る遺物は検出されなかった。



挿図29　1.近義堂表採　2.畠中26　出土

第33トレンチ

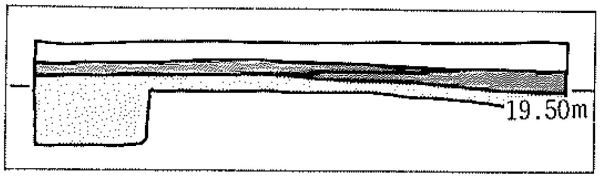
床土の下がすぐ赤黄褐色砂質土層であり、床土中より近世瓦布目瓦が各１点検出されたに止まる。このトレンチ附近がレンガ用粘土の採土のなされた北隅で、このトレンチと第32トレンチの間にテストピットを掘ったがそこには旧地表が残っていた。この地点は採土の為か周辺より低く、湿潤らしく、排水用と思われる、竹敷のめくらあんきょが床土下に作られていた。竹は割竹と節を抜いたものを併用していた。近世のものであろう。



挿図30　第33トレンチ平面ヱ断面図

第34トレンチ

当初予定した地点が下水道工事のため盛土がなされていたので予定路線内の反対側隅に設定した。この地



挿図31　第34トレンチ地層断面図

点は周囲より高く、採土がなされたか否か判別し得ないが、床土下はすぐ赤黄褐色砂礫土で、床土中より布目瓦、近世瓦が若干出土した。

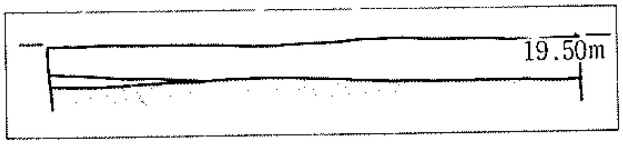
第35トレンチ

この地点はレンガ用粘土の採土地であり、地表下約 1.5m まで埋め戻された土であった。この攪乱土中よりコンテナ4ケース程度の布目瓦、中、近世瓦と若干の中、近世土器が含まれていた。その為か地層が軟弱でしかも湧水が激しく壁面の崩壊が著しいので地山の検出と地層断面図の作成を中止した。

第36トレンチ

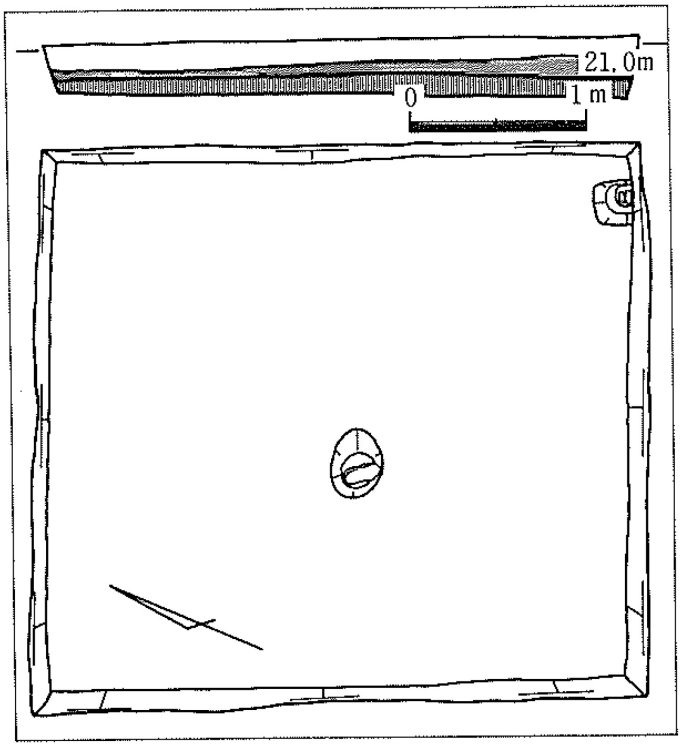
レンガ用粘土の採土のため、耕土下は灰白色半粘半砂質土層である。

第37トレンチ



挿図32　第37トレンチ地層断面図

レンガ用粘土の採土地に当り、耕土の下はすぐ赤褐色砂礫土の地山である。元は第38トレンチと同じ高さに地表があったのであろう。遺物は何ら検出されなかった。



挿図33　第38トレンチ平面・断面図

第38トレンチ

第2層より瓦器、土師を数点出土した。黄褐色粘質土の地山面に直径約40cmの掘立柱の柱穴を2ケ検出した。トレンチ中央の柱穴は、栗石が置かれ、土師器1片と瓦器8点が入っていた隅の柱穴には布目瓦が2枚ひいた状態で出土し、あるいは栗石の代用をしていたのかもしれない。中世以降の建築遺構であろう。

〔V〕ま と め

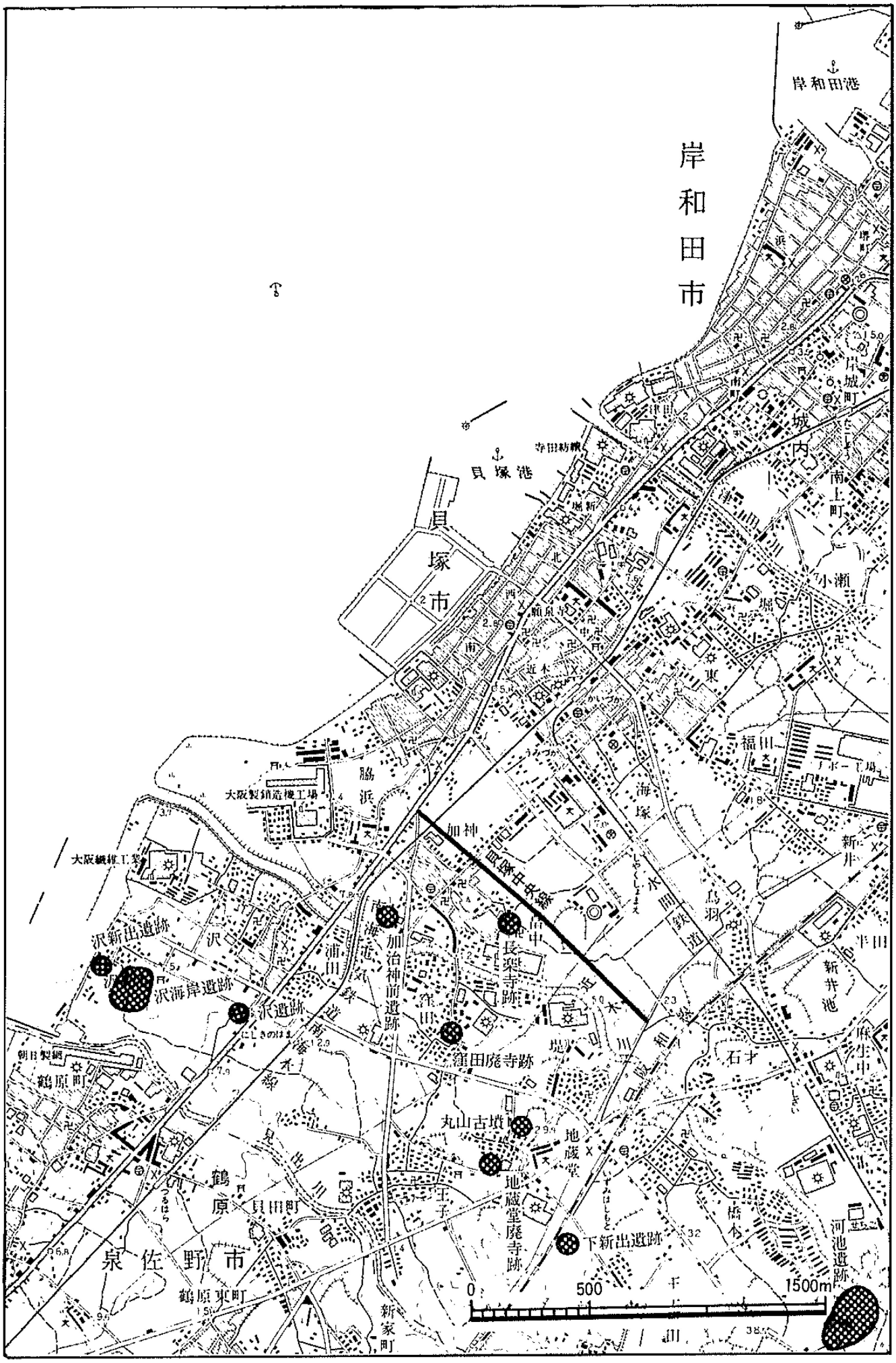
脇浜、畠中、石才近義堂の３遺跡それぞれから遺構、遺物が検出された。

脇浜遺跡では弥生時代から、中・近世までの遺物が出土、その量は弥生時代は約10点、と少なく、古墳時代、奈良、平安時代も時期が判るものはいずれも10点未満である。中世遺物も20点未満で、全般的に少ない。遺構の遺存が予想される地域は第１トレンチ附近と第７トレンチから第11トレンチまでの地域であり、今回の調査で時期が確認された遺構は第１、11トレンチでの中世遺構だけである。第９、10トレンチ附近等は中世以前の遺構の存在が十分予測されうる。遺構の存在する層位は縦線のスクリーントーンで示した黄褐色土層中もしくはその下面で確認されており、又黒色土層の中位でも遺存するかもしれない。従って遺構の埋没深度は地表下50～70cm前後である。

畠中遺跡では縄文から中・近世までの遺物が出土、その量はコモ池周辺が古墳時代遺物を中心に最も多く、第25、26トレンチ附近に弥生時代遺物が集中している。遺構の遺存は第12から第32トレンチまでの全地域で予測されるが、第26地点と第31地点はそれぞれ弥生、古墳時代と時期の確定出来た遺構として注目される。遺構の遺存する層位は３層に大別され、黄褐色系の層はいくつかに分層されるが、この層と黒色土上面が中世以降。黒色土層中もしくは黒色土直下の暗黄褐色粘質土層上面が中世以前から古墳時代まで、そして黒色土下層が古墳時代以前とすることが大局的には可能と思われる。遺構の埋没深度は地表下40～ 100cm前後である。

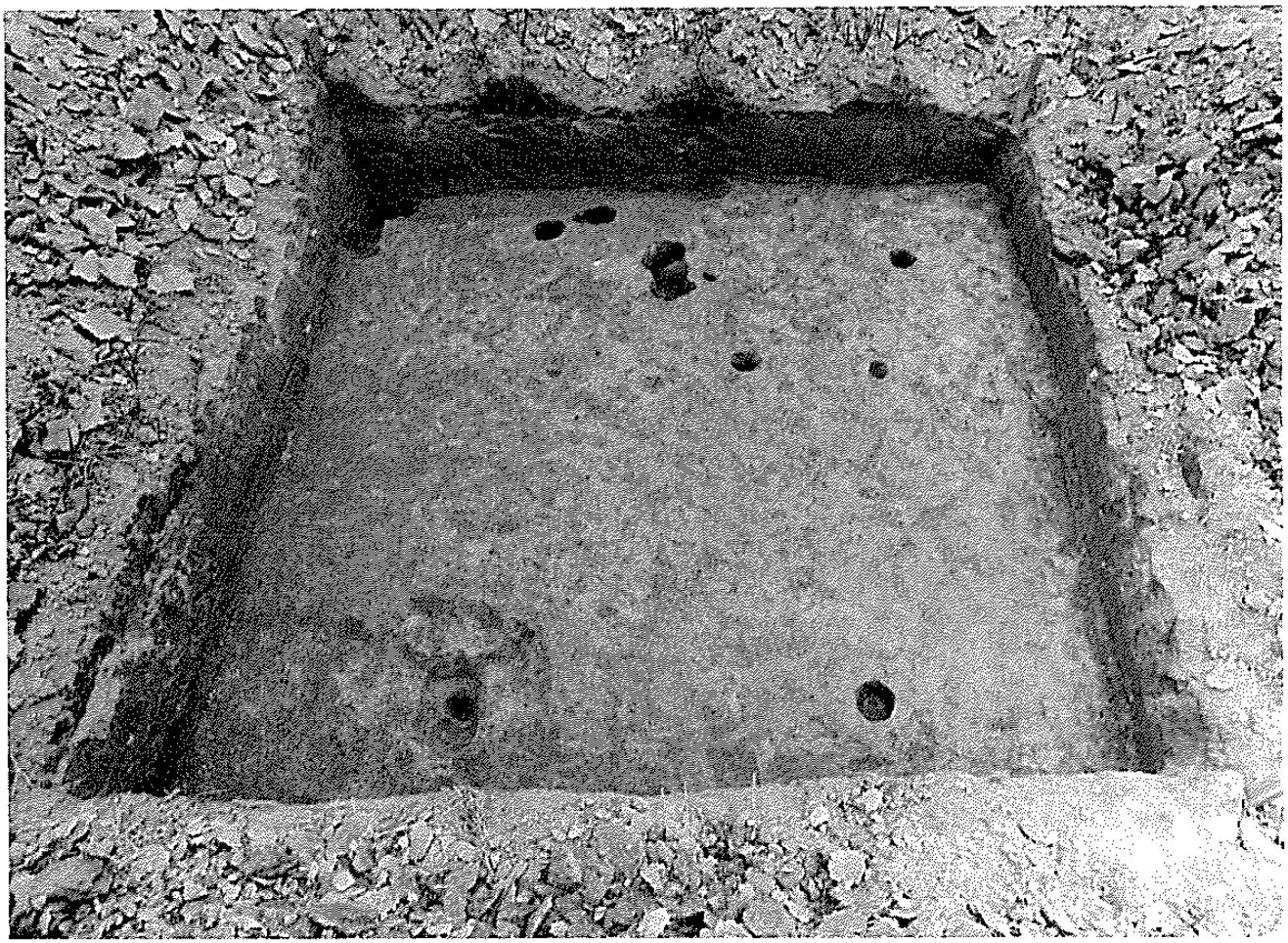
石才近義堂遺跡は採土による攪乱が著しく、旧地形の残るのは第38トレンチ附近の台地状になったわずかな地域だけである。遺物は第38トレンチで出土した瓦器の他はほとんど瓦である。しかしそれも大部分は第35トレンチの攪乱層中からである。第38トレンチで検出された建築遺構は存在が予想される近義堂廃寺と直接関通するか不明である。遺構面は浅く表土下30cmにすぎない。

図版一　調査地域周辺の遺跡分布図

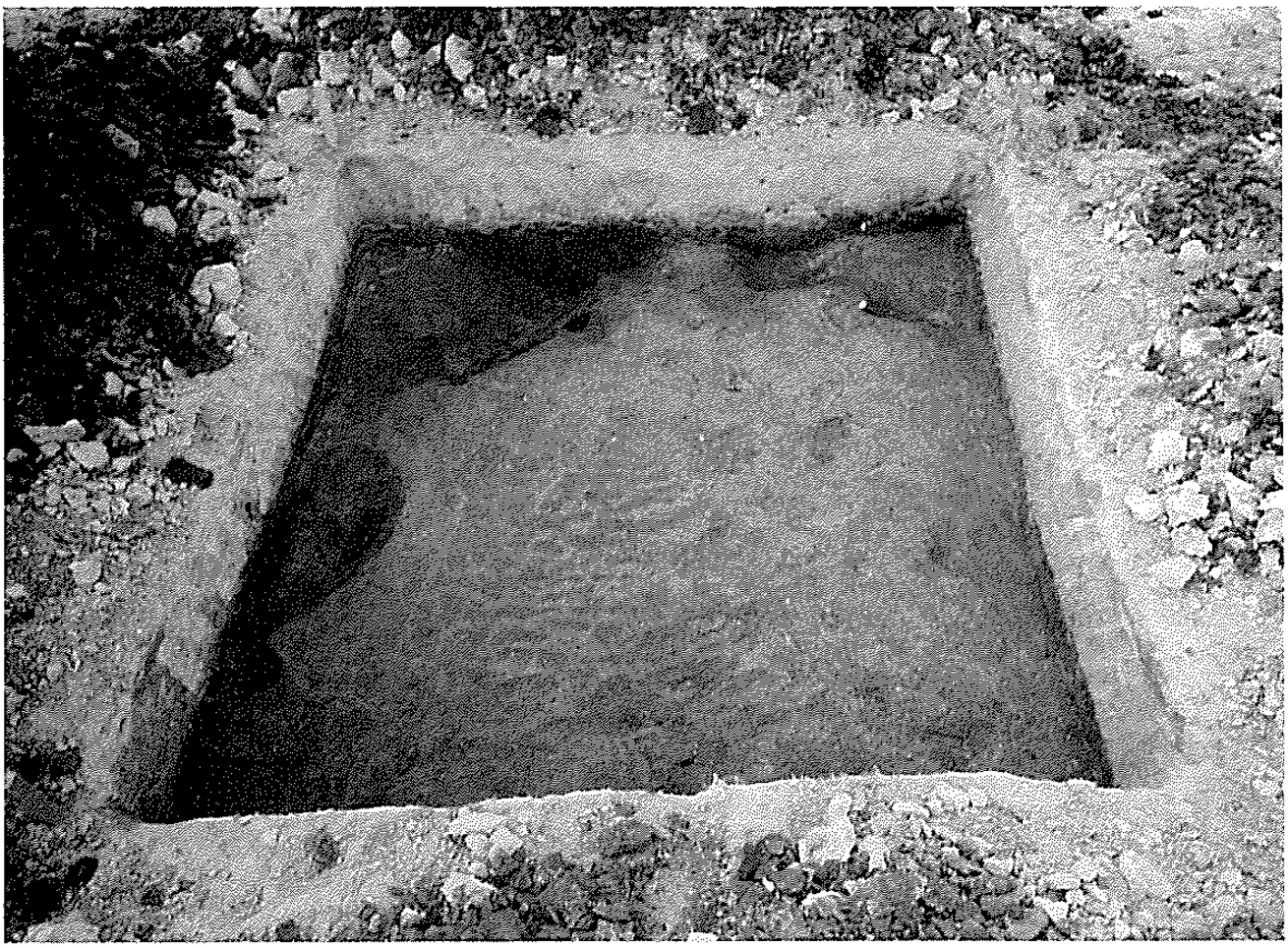


脇浜遺跡遠望（北西より）

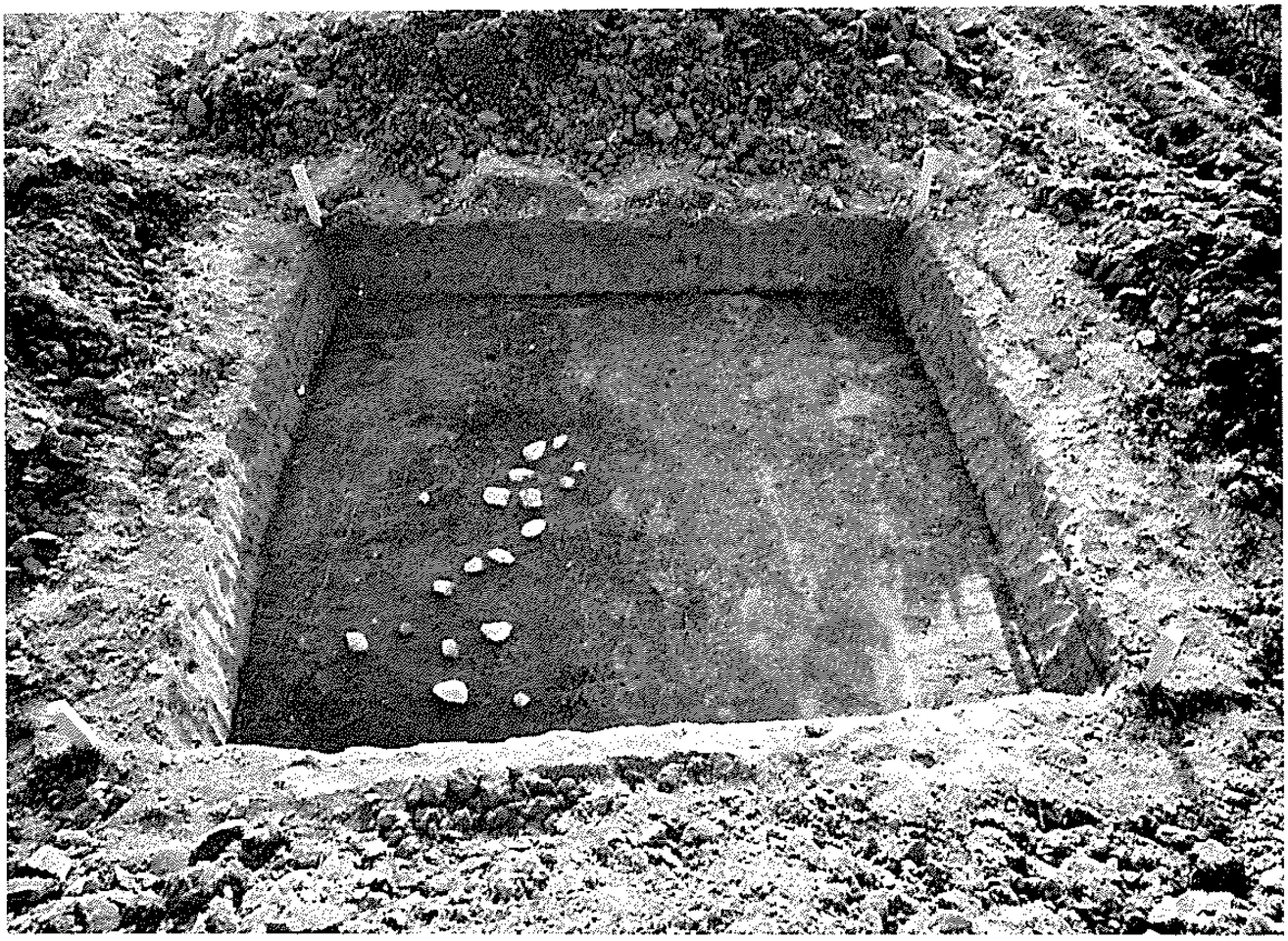
畠中遺跡遠望（東より）



脇浜遺跡第１トレンチ



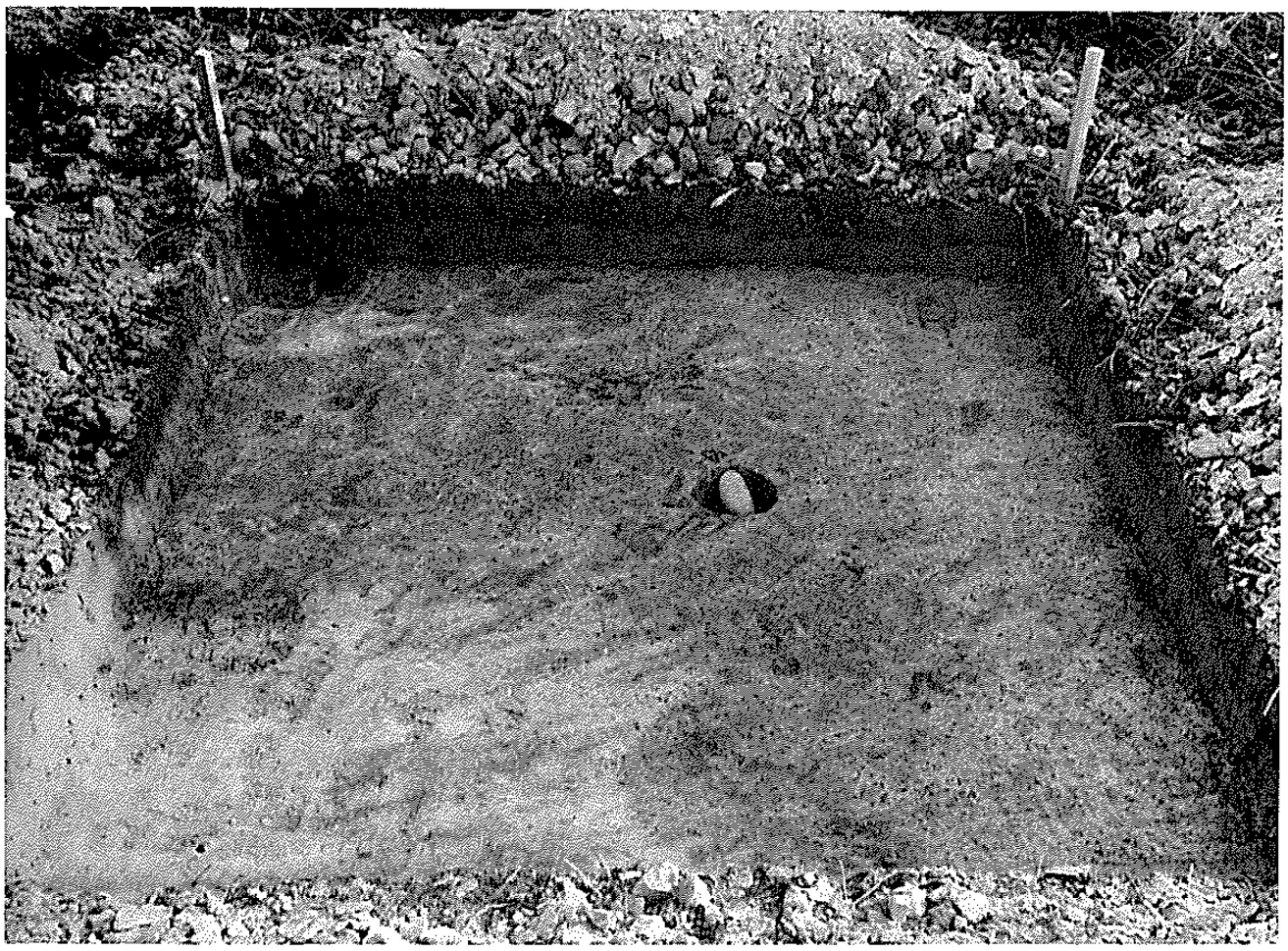
脇浜遺跡第９トレンチ



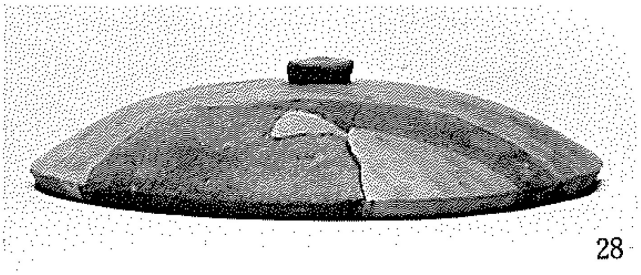
畠中遺跡第25トレンチ

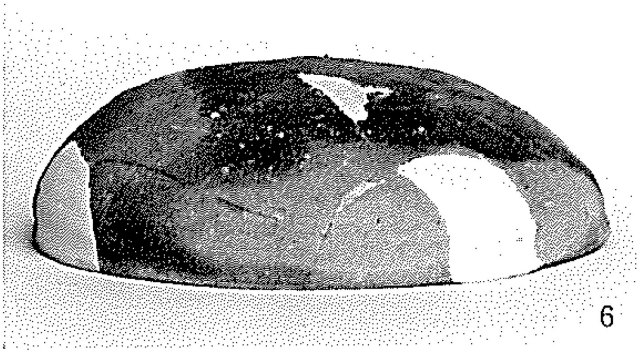
畠中遺跡第26トレンチ

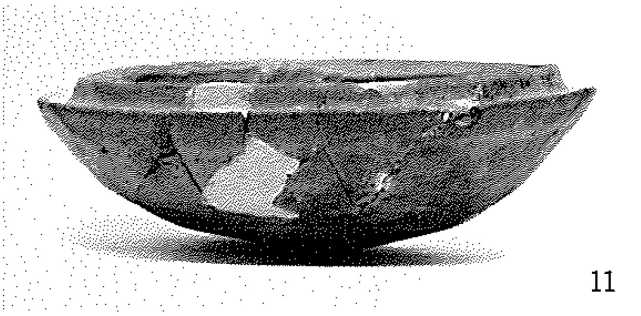
畠中遺跡第31トレンチ

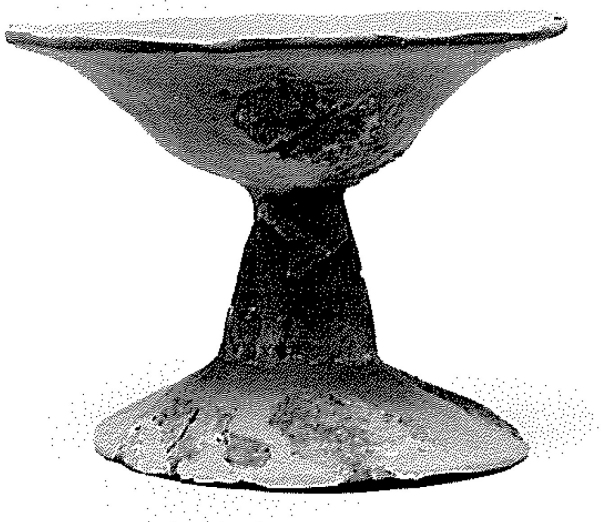


石才近義堂遺跡第38トレンチ



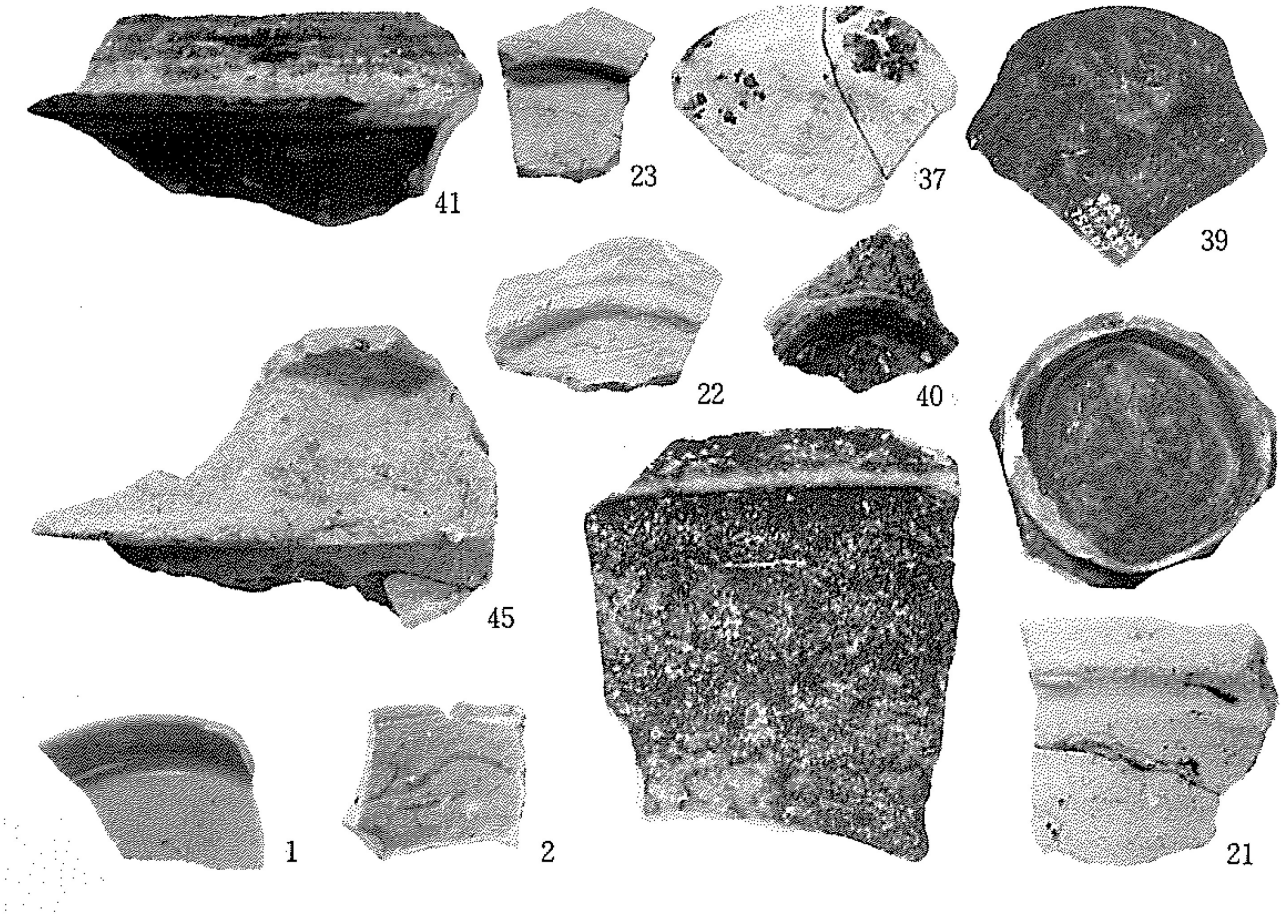




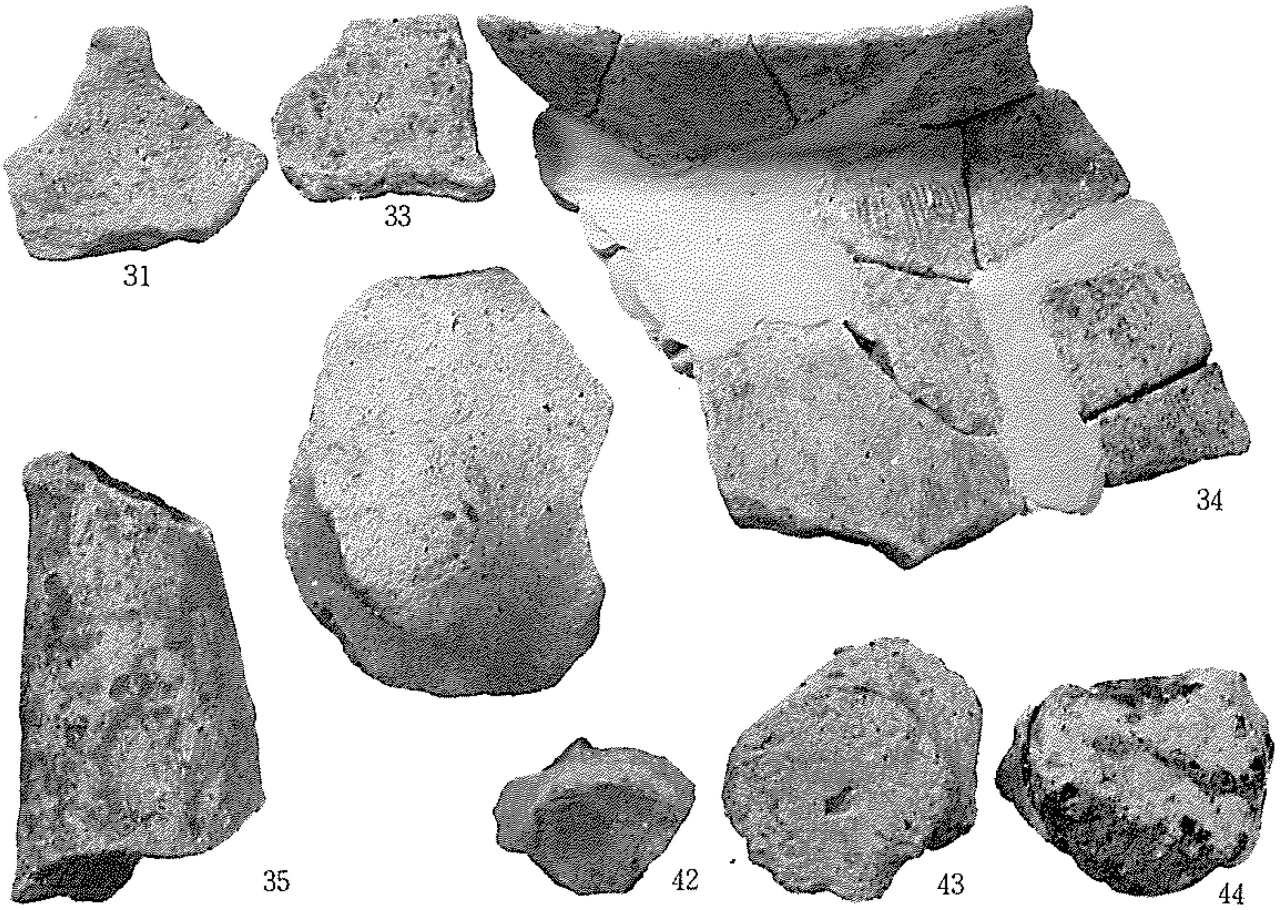


畠中遺跡第25トレンチ出土(28)　第29トレンチ(13)　第31トレンチ(6・11・17・19・36)

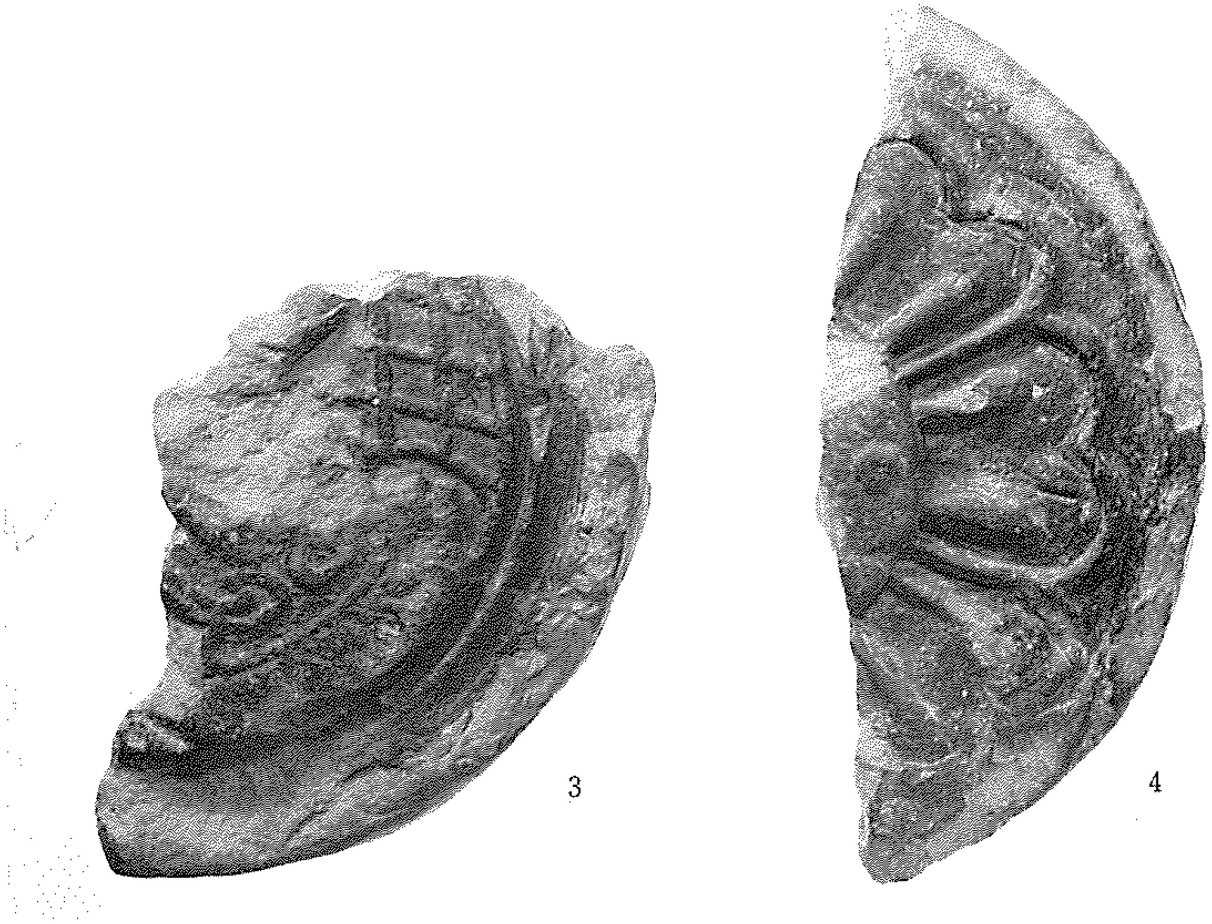
近義堂遺跡：表採(1)　第38トレンチ(7)　脇浜遺跡：第7トレンチ(3～6・8)　第11トレンチ(9)



脇浜遺跡：第7トレンチ(1)　畠中遺跡：第25トレンチ(2・22・37・41・45)　第17トレンチ(21)
第22トレンチ(39・40)第19トレンチ(23)

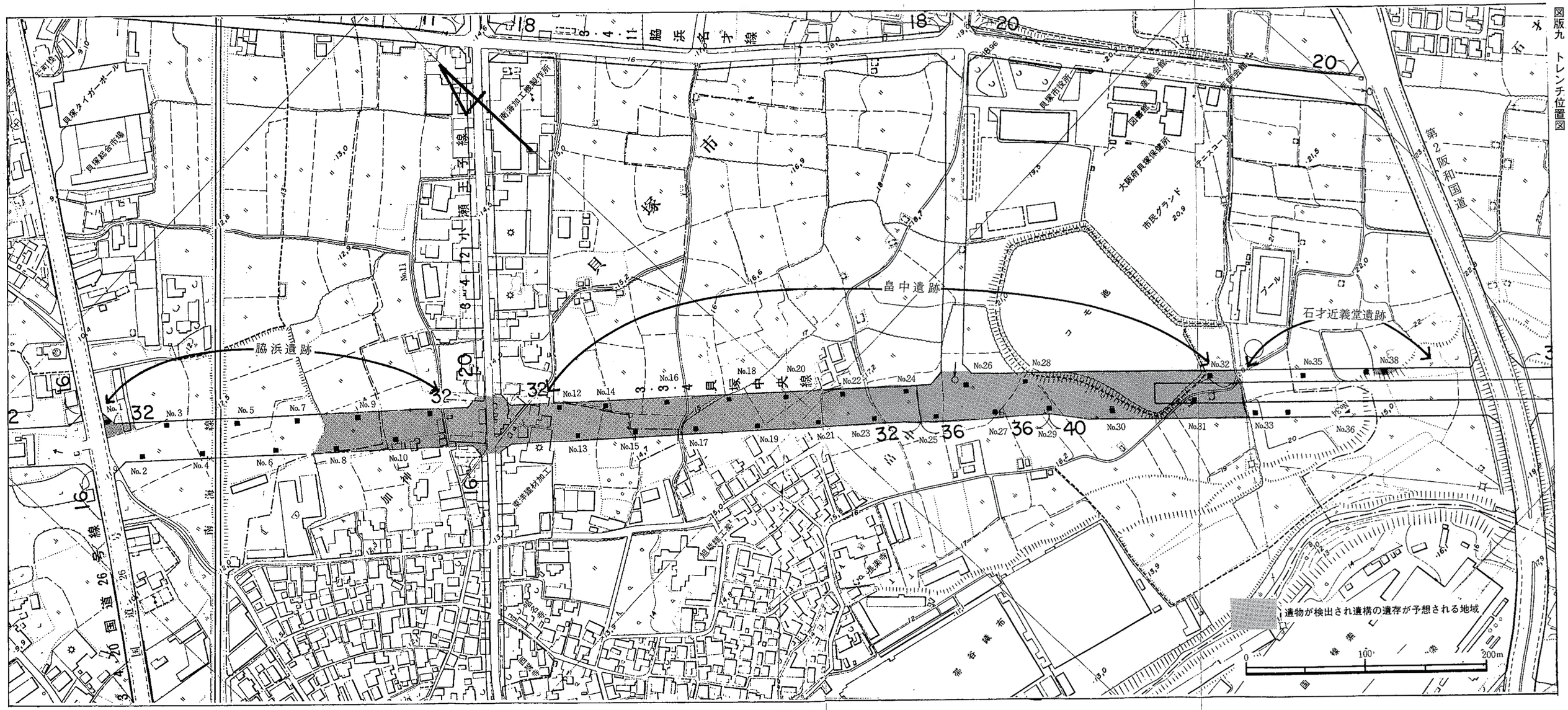


畠中遺跡第31トレンチ出土 遺物

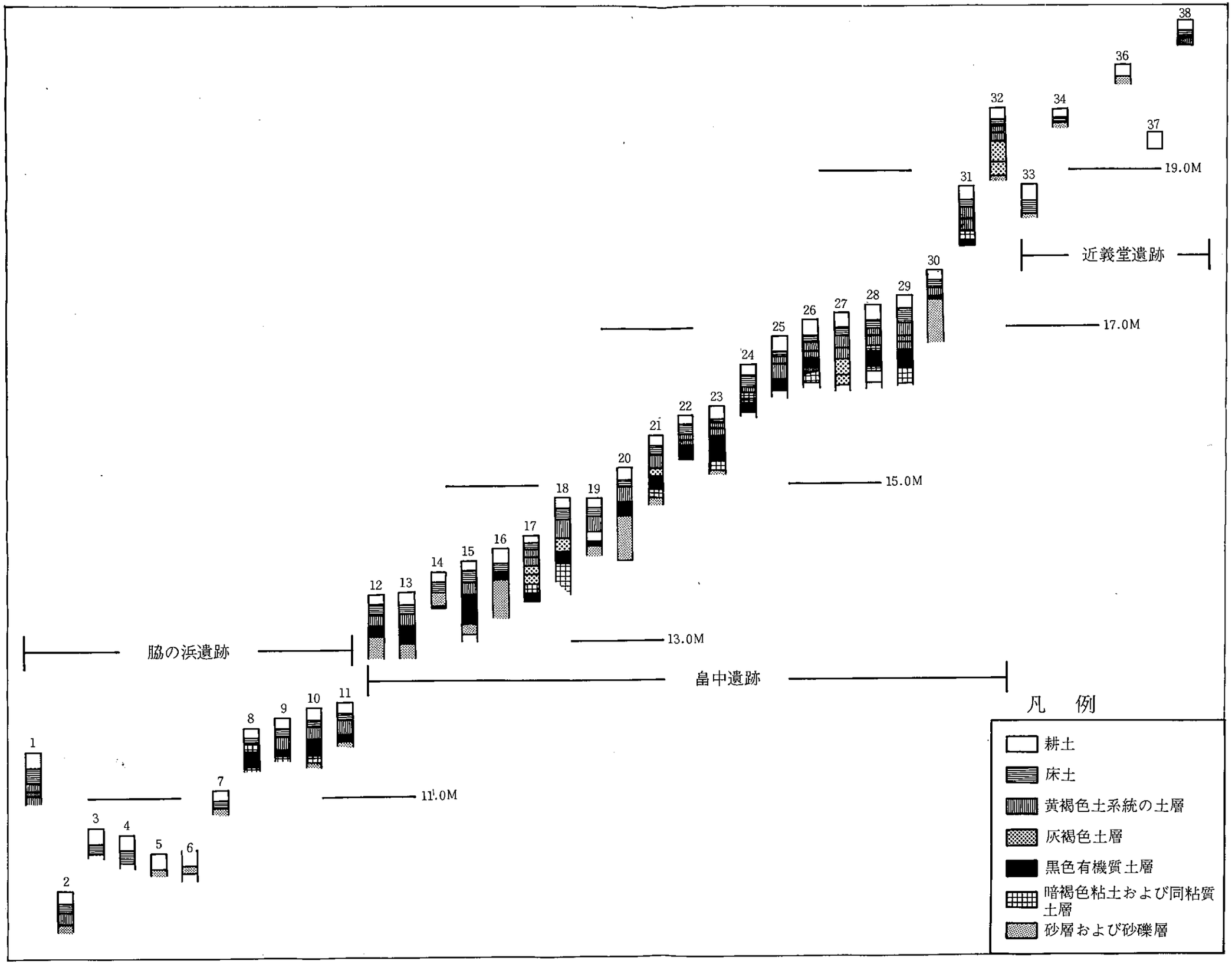


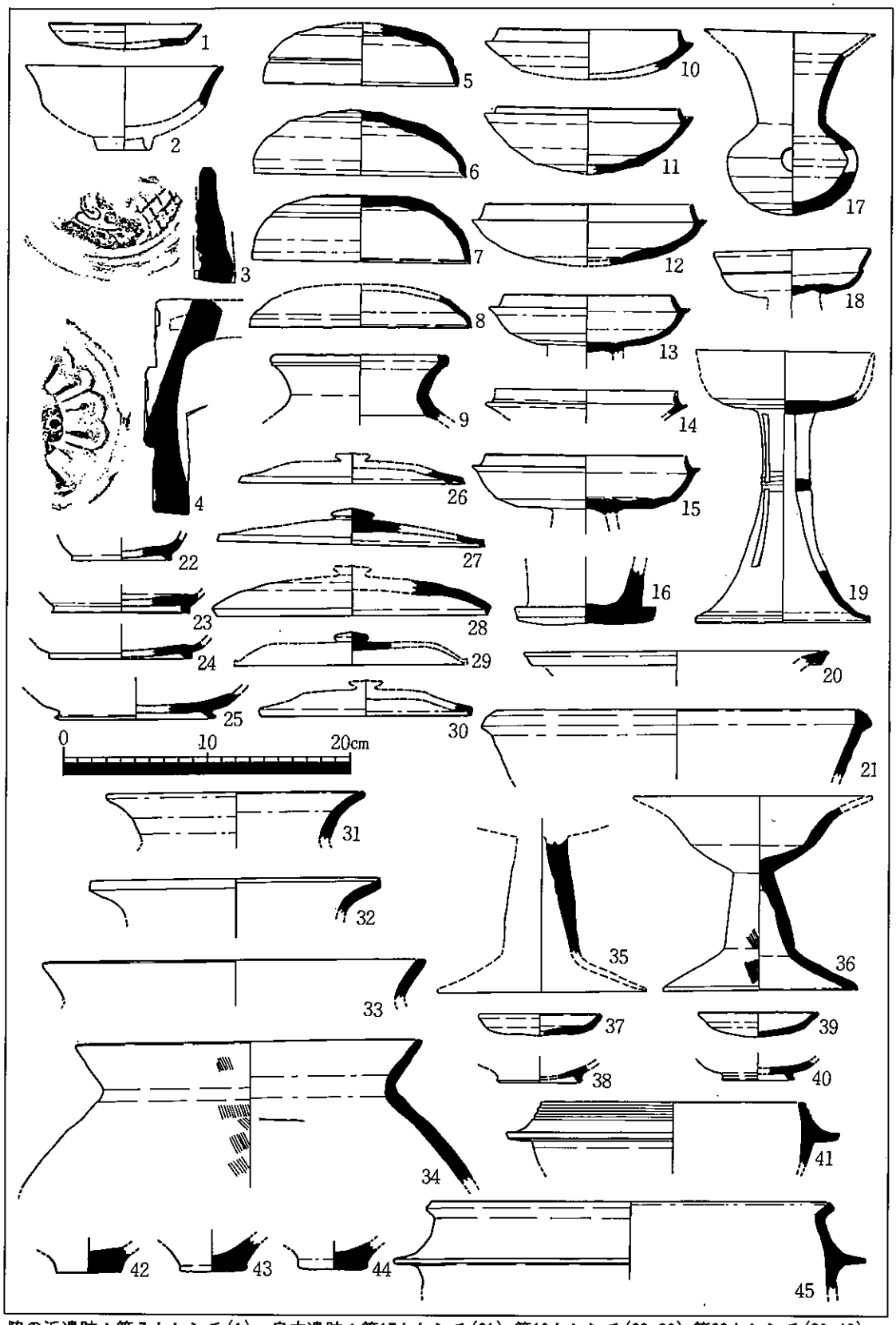
近義堂遺跡表採古瓦（南川氏蔵）

図版九　トレンチ位置図


3・4・11 臨浜名ヂ線
貝塚市
貝塚タイガーボール
貝塚総合市場
南海加工機製作所
3・4・12 貝塚王子線
貝塚市役所
図書館
大阪府貝塚保健所
市民グランド
プール
第2阪和国道
畠中遺跡
石才近義堂遺跡
脇浜遺跡
3・3・4 貝塚中央線
No.1
No.2
No.3
No.4
No.5
No.6
No.7
No.8
No.9
No.10
No.11
No.12
No.13
No.14
No.15
No.16
No.17
No.18
No.19
No.20
No.21
No.22
No.23
No.24
No.25
No.26
No.27
No.28
No.29
No.30
No.31
No.32
No.33
No.35
No.36
No.38
南海線
加神社
東洋建材加工
福祥建工業
長泉寺
南海本線
国道26号線
遺物が検出され遺構の遺存が予想される地域
0
100
200m

図版十　脇浜・畠中・近義堂遺跡地層柱状図





脇の浜遺跡：第７トレンチ(1)　畠中遺跡：第17トレンチ(21) 第19トレンチ(23.29) 第22トレンチ(39.40) 第24トレンチ(13) 第31トレンチ(5.6.7.8.9.10.11.12.15.16.17.18.19.31.33.34.35.36.42.43.44) 第32トレンチ(14) 表採(25.32) 近義堂遺跡：表採(3.4)